
能力～チカラ～

ラスプーチン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力〜チカラ〜

【Nコード】

N2100C

【作者名】

ラスプーチン

【あらすじ】

物騒な近未来。15歳の中学生たちはエナジースーツという変身能力を持った。そんな中学生たちの十人十色の物語。

energy1：エナジースーツ

西暦20XX年 今とそれほど文明はかわっていない。
しかし世界は少しかわった。

日本の過激派や外国テロ組織の活動が活発になっていた。毎日と言つていいほど事件が各地で起こり、首都東京も廃墟寸前となっていた。そこで日本政府は首都を大阪に移した。そこに国会議事堂や総理官邸を建てた。今までとは比べものにならないほどのハイテクさで。事件は極端に少なくなった。日本政府は国会議事堂周辺を^{まも}守^{りくち}口と呼ぶことにし、最近は正式に市になった。

事件は極端に少なくなったが組織は一向に減らなかった。そこで日本政府は「エナジースーツ」なるものを開発した。これはそのスーツを着ることで自分の身を守れるという物だ。今はまだであり守口市内の十五歳の中学生にのみスーツを与えている。ちなみに最初から使えるわけではなく不意に訪れるという。

20XX年5月14日

ここは守口市立第壱中学校。守口市の学生は栄光ある未来が与えられたエリートたちがいる。

???「あゝ、ヤバイ！遅刻したかも！」

この男は野木正也。エリートの中でも悪いほうかもしれない。

正也「えっ・・・」

朝礼が始まる時間は8時30分しかし彼が学校に来たのは7時30分だった。

???「おや朝早くにえらいねえ。」

後ろから来た男は藤崎義景。読書好きである。

チャリンチャリン

義景「カギがないと教室は開かないぞ。」

正也「そ、そうだな・・・」

ガチャガチャ ガラガラガラ

義景はカギを開け正也と共に教室に入った。

それから2人は仲がいいわけでもなく。沈黙の時を過ごした。ちなみに義景は1人本を読んでいる。

数十分後・・・1人、また1人とやってきていつしか教室はしゃべり声でいっぱいだった。

そして・・・

「よっ！お坊ちゃま！」

「天才！」

「ハンサムボーイ！」

1人の男が現れるとそんなことを言う人たちが出てきた。

????「おいおい、俺は天才じゃないって行ってるだろ？」

彼の名は伊能隼人。エリート中のエリートだ。そんな中藤崎は・・・

藤崎「732年、フランク王国はトゥール・ポワティエで・・・」

数人の友達に囲まれ延々と歴史の話をしている。どうやら本で読んだ内容を話しているらしい。

その中に1人の男がいた。その男に正也が声をかける。

正也「おい、こんな話聞いてたら耳にタコできねえか？」

????「いや。結構楽しいと思うけどなあ・・・」

彼の名は三島治樹。数日前に転入してきた男だ。

正也「はあーっ。」

ため息をついた正也は自分の席に座った。

正也「ん？これはたしか・・・」

不意に気になったのはかばんについてあるキーホルダーだった。このキーホルダーはエナジースーツになるための変身道具だ。といっても、まだ力が使えない正也にとっては何の関係もない。

正也「エナジースーツか・・・」

放課後

正也はいつものように家に帰っていた。すると・・・
ガタガタガタ・・・

一台のトラックが走っていた。荷台はマントに包まれている。

正也「あれは確か「革命のメス」の・・・」

「革命のメス」とは武装テロ組織の一つである。そのトラックは突然止まり、荷台から数人に男達が降りた。すると突然・・・

ドガガガガツ バババババツ ガガガガガツ

マシンガンを空にぶっ放った。

革命のメス隊長「出てこい！！エナジースーツの奴！でないとここに
いる奴殺すぞ！」

明らかにエナジースーツを使えるやつへの挑発だった。どうやら大勢の仲間がやられたらしい。

隊長「早く出てこい！さもないと・・・あっ！」

隊長が驚く顔の先には1人に黄色いスーツを着た男が壁の上に立っていた。そのスーツは手の足に赤い手袋のようなものはめておりその手袋にスピーカーのような物がついていた。

隊長「てってめえは！」

???「私はインバルト。また会ったな。「革命のメス」。」

隊長「ぶっ殺せ！！」

ガガガガガツ

一斉掃射だ。しかしインバルトは・・・

インバルト「フツ・・・」

ダンツ

いたって冷静だった。インバルトは突如飛びあがった。飛びあがる際に爆風がおこり、飛びあがったというよりは跳ね上がったという感じに近かった。

バツ ドウン

そしてインバルトは腕を前に伸ばし何かを放出した。

「革命のメス」隊員「ぐわっ！！」

隊員たちは吹っ飛んだ。

隊長「いま何をだしたんだ!!」
スタンツ

インバルト「知ったところでどうなるわけでもないがな・・・空気の衝撃波だ。」

隊長「空気だと?」

ダウン

隊長「ぐっ!!」

ドガン

隊長は衝撃に飛ばされ、壁に激突した。

インバルト「さあ・・・どうする?」

隊長「どうするもくそもねえだろ!!!」

ガガガガガガウン

隊長はインバルトに向けてマシンガンをぶっ放った。しかし・・・
ビシビシビシビシイ カランカラン・・・

インバルト「このスーツは衝撃吸収スーツだね。大して効かんよ。」

隊長「そんな・・・」

プルプル

隊長が震えている内にインバルトは一步一步近づいてくる。そして・

・

ドン

腹にパンチをもらい隊長は気絶した。

インバルト「当分は起き上がってこないか。2分も経てば警察もくるな・・・」

バツ

インバルトは去っていった。それを見ていた正也は開いた口が塞がらなかった

正也「・・・これがエナジースーツってやつでそれを着ているやつがオレと同じ年だなんて・・・」

終

エナジースーツ紹介

「インバルト」

装着者 ????

能力 手足から衝撃を出す

外見 スパイダーマンのショッカーに似ている

energy2：ライバル

正也「おい三島！ちよつと聞いてくれよ！」

昨日見たことを正也は早速学校で治樹に話していた。

正也「見たんだよ見たんだよオレ！エネルギーを！」

治樹「どんな感じだったんだよ？」

正也「なんていうか・・・一瞬だったんだよ！手から何か・・・なんだったっけな？」

???「それは衝撃波だった。」

後ろから来たのは義景だった。

正也「ふ、藤崎！？お前もアレ見てたのか？」

義景「まあな。」

正也「オレらにもあんな力があるっていうんだからビックリするよな？」

???「そうでもないだろ。」

正也「えっ？」

義景「ん？伊能・・・」

今度は隼人が来た。

正也「あんな奴カツコイイと思うけどなあ・・・」

治樹「でもやっぱり普通が一番だろ。」

隼人「そう！普通が一番！あんな能力使えたとしても厄介なだけだろ？」

義景「まあ、人それぞれだな・・・」

放課後 学校近く

何者かが何かを持っている

ピッ ヴァーン

それは小さなテレビのようなものだった。

義景「今日はあそこで武装組織が銃乱射・・・か。」

その何かを持っていったのは義景だった。義景は画面を切り替えると画面の下のボタンを押した

ピッ ピッ ピッ

〔energy〕

義景「インバルト・・・」

義景はインバルトに変身した。実は正也が見たインバルトは義景だった。そして事件現場に向かった。

勝負はすぐについた。

そしてインバルトがその場を去ろうとしたとき・・・

???「待てよっ!!」

現れたのは全身が藍色で胸に雷のマークがある男だった。おそらくインバルトと同じエナジースーツなのだろう。

インバルト「何だ?」

???「俺はライトロン。インバルト、俺と勝負しろ!」

ライトロンというエナジースーツの男はいきなりインバルトに勝負を挑んだ。

インバルト「・・・わかった。受けて立とう。」

ピッ

〔change〕

カアアアアッ

2人は腕についてあるさっきの小さなテレビのような物・・・チェインジビジョンについてあるボタンを押した。すると2人のチェインジビジョンが光った。光りが収まると辺りは閑散としていた。

インバルト「これがエナジースーツを使えるものしか行けない」「ユーズグランド」か・・・」

ライトロン「行ったのは初めてだったぜ・・・」

インバルト「私もだ。」

ライトロン「・・・さあ来い!」

インバルト「なら遠慮なく行かせてもらおうよ。」

サッ ドウン

インバルトは早速衝撃波を出した。

ライトロン「衝撃波か・・・面白いな！」

サッ バリイイイッ

ライトロンは手から鋭く光る何かを出した。そして衝撃波と相殺した。

インバルト「ふっ・・・電気が・・・」

ライトロン「エナジースーツというのも面白いな。いろんな能力があつて。」

インバルト「お互いさまだ。」

ヴァアアン・・・

インバルトは手につけている衝撃波を出す装置・・・ショックレットから衝撃の刃を出した。

インバルト「ソニックブレード・・・」

ヴァアアアッ

一方ライトロンは腰に掛かってある30cmの棒を手にとった。すると棒の先から電気の刃が出た。

ライトロン「エレクトロソード・・・」

ダッ

ギイン ガイン ガッ ガッ ギイン

勝負は互角だった。

ライトロン「やるじゃねえか。お前どんぐらい組織潰した？」

インバルト「5つぐらいかな。」

ライトロン「俺と同じか・・・お前の能力はよくわかった。明日もまた会おうぜ。」

インバルト「まあいいが、明日も戦うのか？」

ライトロン「いや、そうじゃない。一緒にたくさん組織潰そうって言うてんだよ。」

インバルト「そうか、ならまた会おう。」

ピッ

｝back out｝

カアアアツ

2人はチェインジビジョンから出た。

ライトロン「じゃあ明日、市役所まで待ち合わせとするか？そう
いえば正体言ってなかったな。」

インバルト「明日言おう。じゃあな。」

ライトロン「ああ、じゃあな！」

バツ バツ

2人は帰っていった。確かな手ごたえと共に・・・

終

エナジースーツ紹介

「ライトロン」

装着者 ????

能力 手足から電気を出す

外見 スパイダーマンのелеクトロが顔まで装甲で隠した感じ

energy3：ヴァンデミエール

2日後・・・

学校はいつもと変わらない。しかし一つ変わったことがある。それは・・・

義景「やあ、伊能。」

隼人「よう、藤崎。」

義景と隼人が仲良くなったことだ。

隼人「今日は久しぶりに戦わねえか？」

義景「私もそう言いたかったところだ。」

ライトロンは隼人だった。2日前インバルトと初めて会い、昨日正体を知ったのだ。

義景「そういえばフアクションがあることを忘れていたな。」

隼人「あつ、そうだったな！名前は何にしようか・・・」

キンコーン カンコーン

義景「放課後また考えよう。じゃあな。」

隼人「ああ！」

この2人の会話を不思議そうに見ていた2人がいる。

正也「あの2人こんなに仲良かったか？」

治樹「僕はよくわからないけど・・・」

ガラガラガラ

先生「おい！早く座れよー！」

こうして今日の授業は始まった。

昼休み

正也は食堂で治樹ら友達数人と食事をしてた。そして食事を終え、教室に帰ろうと出口に近づいた時・・・

タツタツタツ

???「あゝやばいゝ早く運動場に行かないとゝ」

ドカツ

???「いたゝ。大丈夫？」

正也「いや別に。どうしたんだよ、何か急いでるのか？」

???「うん、ちよつと委員会の仕事があつて・・・じゃあね！」
タツタツタツ

正也にぶつかつた女子・・・烏丸香は走っていった。

治樹「あの人確か同じクラスの・・・」

正也「ああ。烏丸か・・・」

友達A「確か最近弟が死んだとか・・・」

友達B「よく元気でいられるな・・・」

放課後

インバルトとライトロンは連携プレーで早々に過激派団体をたおし
ていた。

ライトロン「やっぱり1人より2人にほうが潰しやすいな。」

インバルト「あまり潰すとかいう言葉は使わないほうがいい。」

ライトロン「まあ、そうだな。」

フラ・・・フラ・・・

???「おい・・・お前ら・・・」

ライトロン「あ、まだ倒せてなかつたか。」

テロ組織や過激派団体を「倒す」というのは殺すわけではなく警察
が来るまで気絶させておくことである。で、そのまだ倒れてなかつ
た過激派団体「革新起」の隊長は2人に何かをしゃべろうとしてい
た。

「革新起」隊長「おまえらかなり強い方だと思うが「ブラックジ
ベン」には敵わないな・・・」

インバルト「ブラック・・・」

ライトロン「ジーベン……」

隊長「そうだ……この「革新起」は「ブラックジーベン」の下部組織。足元にも及ばん。」

ライトロン「おまえらの組織は結構苦戦したほうだったの……」

インバルト「たしかに……2人だからこそ勝てたな……」

隊長「それは総統がお力添えしていたからこそ……グフツ」
ドサツ

隊長は倒れた。

ライトロン「ブラックジーベン」か……聞いたことあるか？」

インバルト「私がいつもチェインジビジョンでみているのはB級だからな……」

チェインジビジョンにはA級・B級・C級の組織リストをリアルタイムで見ることができると。

バサツ スタツ

???「今「ブラックジーベン」って言った？」

壁の上に立つ者……エナジースーツを着ている者は2人に「ブラツクジーベン」について聞いてきた。

インバルト「女か……なぜそんなこと聞くんのだ？」

ライトロン「何者かを名のらずにいきなりそんなこと聞くってことは何かあったのか？」「ブラックジーベン」はおそらくA級の大型組織で、今倒れているやつは「ブラックジーベン」の下部組織だ。」

???「ワタシはリンネス。今「ブラックジーベン」を追っているんだ。理由は言えない……」

ライトロン「手を貸してやるうか？B級組織に飽きていたところだ。」

インバルト「私もそう思っていたところだ。」

リンネス「いや、いい。追っているのは個人的な理由だ……」

ライトロン「インバルト」「その理由というのは？」

リンネス「……弟が殺されたんだ。」

バサツ

リンネスは腕から腰にかけてついてある翼で飛んでいった。「
ライトロン「あいつ飛べたのか。」
インバルト「弟が殺されたってことは……まさか……」
ライトロン「あ、そういえばファクシヨンの名前考えるの忘れていたなあ。何にする?」
インバルト「ヴァンデミエール」……」
ライトロン「何だそれ?」
インバルト「ナポレオンの異名だ。かつこよくないか?」
ライトロン「ナポレオンか……よし!それにしよう!」
インバルト「それじゃ早速登録するか……」
2人はチェインジビジョンを開きファクシヨン登録画面を出し「ヴァンデミエール」と登録した。
ちなみにファクシヨンとはテロ組織などに対抗するための組織である。登録することで。現在の仲間の状況などがわかり、連携性が強まる。

終

エナジースーツ紹介

「リンネス」

装着者 ????

能力 空を飛ぶ

energy4：ブラックジーベン

翌日・・・

学校で義景と隼人は真剣な表情で話し合っていた。

義景「やはり、あのリンネスという奴は・・・」

隼人「あいつしか考えられないな・・・」

義景「伊能。君は何を考えているんだ。」

隼人「あいつを「ヴァンデミエール」に加えようと思ってな。」

義景「「ヴァンデミエール」に加えるということは「ブラックジーベン」といづれ戦うということだぞ。」

隼人「それならそれでいいだろ。」

義景「やれやれ・・・」

その頃烏丸は・・・

烏丸「・・・でさー・・・ハハッ・・・」

友達としゃべっていた。

そして放課後・・・

バサッ ヒュウウウ・・・

リンネスは空を飛んでいた。そして着陸した。すると・・・

リンネス「あんなたち・・・確か・・・」

ライトロン「やつぱりな。「ブラックジーベン」の下部組織っぽい組織の所に行ったら来ると思ったんだよ。」

インバルト「リンネス・・・いや・・・烏丸香。私たちの組織に入らないか？」

リンネス「え・・・何でワタシの正体バレてるの・・・？」

リンネスは動揺していた。凶星だったらしい。

インバルト「やはりな・・・お前が烏丸香なら話はわかる。弟を殺したのは「ブラックジーベン」か？」

リンネス「何でそんなこと聞くんだよ？だからどつだといつものよ？」
ライトロン「味方を1人でも増やそうと思ってな。」

リンネス「味方？何の？」

ライトロン「ブラックジーベン」を潰すためのな。」

リンネス「何のために潰したいの？」「ブラックジーベン」はおまえらじゃ絶対に勝てない組織よ！？」

インバルト「絶対に勝てない組織か・・・お前はその絶対に勝てない組織に挑もうとしているのだぞ。」

リンネス「わかってるわよそんなこと。でも・・・」
インバルト「でも？」

リンネス「おまえたち2人が守口第壱中学校のどこのどいつかは知らないけれど、ワタシの気持ちなんて絶対にわからないわよ・・・」
ライトロン「そんな俺らには関係ねえよ。組みたいから組む。ただそれだけだ。」

リンネス「・・・」

インバルト「・・・」

ライトロン「・・・」

一瞬の沈黙が流れた・・・その時
バツ

???「君達が我が「ブラックジーベン」の下部組織を次々と潰しているやつらかね？」

3人の前に日輪の仮面をつけたマントの男があらわれた。

ライトロン「誰だお前は？」

???「俺の名はマスク・オブ・サン。「ブラックジーベン」幹部
よ。」

リンネス「「ブラックジーベン」幹部・・・!!」

マスク・オブ・サン「話は聞かせてもらった。リンネスと言ったかね？貴様の弟を殺したのは我が「ブラックジーベン」最高幹部マスク・オブ・ゴールデン様だ。」

リンネス「・・・」

インバルト「どうしてそんな事言うんだ？」

サン「どうせお前らは死ぬからさ！！アポロンロッド！！」
サツ

サンは手に持っていた先端に日輪が付いている棒・・・アポロンロッドを構えた。そしてアポロンロッドを地面に刺した。

サン「あがれ！！火柱！！！」

3人の真下に火柱が上がった。

インバルト「クウ！」

ライトロン「うおっ！」

リンネス「はあっ！」

バサツ

インバルトとライトロンはなんとか避けた。リンネスは空を飛んだ。サン「フン。よけたか・・・だが！」

ダツ ガイン ギイン キイン

サンはまずインバルトにアポロンロッドで襲った。火柱にあっけをとられていたインバルトは驚いたがすぐにソニックブレードで応戦した。

サン「何だそれは？」

インバルト「衝撃波だ・・・」

サツ ドウン

サン「衝撃波!?!」

バツ・・・バリリリイイ

サンは避けた。しかし今度はライトロンの電撃が襲い掛かった
バジイイツ ガクツ

サンの背中に直撃した。

ライトロン「へへ・・・」

サン「おのれえ・・・調子に乗るなよ・・・」

シユウウウウウ カアアアツ

サンの仮面が赤く光りだした。そして・・・

サン「くらえ！！アポロンシャイン！！！」

ピカアアアアツ

サンの仮面から赤く光り輝く光線が放たれた。

ライトロン「うわああっ!!!」

インバルト「なっ!!!」

油断していた2人は直撃とまではいかなかったがダメージをくらった。

サン「ふふふ・・・これが「ブラックジーベン」幹部、マスク・オブ・サンの力だ!ふふ・・・」

ズバツ

リンネスが後ろから急降下し、翼で背中を斬り裂いた。

サン「グアアアツ!!!」

リンネス「調子に乗っているのはどっち?」

サン「まだ貴様がいたか・・・逃げたと思っていたがな・・・」

リンネス「弟を殺されたのにここにいる無関係の2人より逃げると思う?」

ライトロン「・・・まるで俺達が弱いみたじゃねえか・・・」

リンネス「そういう意味じゃないけど。」

シユン

リンネス「クロス・・・ウイング・・・」

サン「見・・・見えん!!!」

リンネス「ストラアアイク!!!」

リンネスは高速低空移動をし、サンに近づき、翼で×字状に斬り裂いた。

スタンツ

ガクガク

サン「今回はまだ小手調べだ・・・ハア・・・これから「ブラックジーベン」は本格的な活動に入る。」

リンネス「逃げるんだったら勝手にすれば?ただし次に来るときはマスク・オブ・ゴールデンも一緒にね。」

サン「フン。貴様ら如きにゴールデン様の力を借りなくても・・・

また会おう。」

ジユウウウツ

サンは水蒸気になって消えていった。

インバルト「「ブラックジーベン」幹部、マスク・オブ・サンか・

・

ライトロン「これで幹部か・・・笑わせるぜ・・・」

リンネス「何よ!?ワタシがいなかったらあんたら死んでたかもしれないのよ!?!」

ライトロン「そんなこたあねえよ。」

インバルト「・・・で、私たちの組織に入らないか?」

リンネス「・・・ま、いいわ。名前なんていうの?」

インバルト「「ヴァンデミエール」。ナポレオンの異名だ。」

リンネス「あっそ。」

こうして「ヴァンデミエール」に新しいメンバーが加わった。

終

リンネス

外見：スパイダーマンのヴァルチャーの翼が青く、仮面を付けたよ
うな感じ

敵紹介

名前：マスク・オブ・サン

所属：ブラックジーベン

武器：アポロンロッド 最大1000 まで熱くすることができる。

energy5：ライフル

治樹「なあ、野木。僕、見たんだよ。」

正也「え？見たって・・・エナジースーツか？」

2人はまた、エナジースーツについて話していた。

正也「おい、ほんとはエナジースーツの近くには行っちゃいけないだろ？」

実はエナジースーツが戦闘中は半径500m以内に入ってはいけないかった。

治樹「実は僕、とても目がいいんだ。それに、野木も見たんだろ？」

正也「あれはしょうがなかったんだ。って目がいいってどんぐらい？」

すると治樹は遠くの机の落書きを見た。すると・・・

治樹「イエイ、イエイ、イエイ・・・こんなんが全部で47個書いている・・・」

まあどこにでもある落書きだ。

正也「ほんとか？どれどれ・・・」
スタスタスタ

正也は机の近くまで寄ってみた。
タッタッタ

正也「おい・・・お前合ってるよ。すげえ目がいいじゃねえか。」

治樹「そんなビックリすることないと思うけどなあ・・・」

その異常ともいう視力が役に立つ日はそう遠くなかった・・・

放課後・・・

ちよつとした物を買いにスーパーに行った治樹はその帰り・・・
ブーン

車が近くにとまった。

「???「おい!!!」

ドガガガガッ

「???「おい!ここにいる奴何人か人質にしろ!」

構成員たち「「「へい!総長!」」」

総長と呼ばれる男の命令により構成員たちはスーパーの駐輪場前にいる客十数人に銃口を向けた。

総長「よし。さてと・・・」

カチャカチャカチャカチャ

総長は車に搭載してあるパソコンに何かを打ち込んだ。しかし・・・その手は止まった。

バツ

スタツ

リンネスとライトロンが来たからである。

総長「ふっ・・・来たか。「ヴァンデミエール」と言ったか。これからお前達にこの事を教えてやろうと思ったが・・・やはり速いな。」

「

リンネス「あんたたち、「ブラックジーベン」の下部組織ね?」

ライトロン「ふっ、インバルトは別の仕事で行ってるがな。」

リンネスとライトロンがやって来た。一方駐輪場の左端に隠れている治樹は・・・

治樹(二回も見れるなんてな・・・僕、ラッキーかも。)

少しワクワクしていた。

総長「その通り。我々は「ブラックジーベン」の下部組織の中でも最強の「ブラックゲバウト」だ。我々には人質がいる。どうするかね???

リンネス(人質か・・・)

ライトロン(やろうと思えばいけるが、もし人質にあつたら・・・)

総長「お前達が我々「ブラックジーベン」を追わないならここに人質は解放してやる。」

ライトロン「なんだと!!」(・・・ここまできて手を引くだと・・・)
リンネス「そんなの無理よ!!」(手をひけるわけじゃない・・・!)

総長「時間ならいくらでもやる。じっくり考えな。」

治樹(何だつて!何言ってるんだよ・・・)

ピイイイイン・・・ジャキーン

治樹(え?これ・・・確か・・・)

そんなことを考えていると治樹の腕に何か装着された。それはエナジースーツに変身できるチェインジビジョンだった。

<<あなたはエナジースーツの装着者選ばれました。一番右のボタンを押して下さい。>>

治樹(何だ、この声?直接脳に流れてくるような・・・えっと・・・右のボタン・・・つと)

ピッ

energy

<<エナジーと鳴りましたなら「サージルグ」と言ってください。

>>

治樹「・・・サージルグ。」

ピッピッピッピッ

<<変身します。>>

カアアアツ ジャキーン

治樹が「サージルグ」と言うと脳に流れるガイダンスの後、体が光り、全身に迷彩服が、腕にライフルが装着された姿・・・サージルグに変身した。

総長「な、何だ!!」

ライトロン(あれは新しいエナジースーツ!!)

リンネス(変身したのは・・・誰!?)

サージルグ「え・・・これって・・・エナジースーツ!!!!?」

総長「フフフ・・・あいつ初心者のような。おい!!その場を離

れる!!」

サージルグ（離れるって言われても・・・人質を解放するした方がいいよな・・・）

そんな事を余裕で考えることができたのはサージルグの特性にあった。サージルグの主な攻撃は射撃で、視力が強化されている。更に治樹自身の視力も異常にいいため、今のサージルグの視力はアフリカのどっかの民族以上に良くなっているのだ。

サージルグ「んゝ・・・」

総長「速く離れろ!!」

サージルグ「・・・よしっ!!」

ダツ バキューン・・・バウン ガガガガガッ

サージルグは駐輪場の左端から右端まで走り人質に銃口を向けている構成員たちにライフルを撃った。

構成員たち「うっ!!」「ちい!!」「くそお!!」

バタツ ガクツ ドサツ

全ての構成員たち銃弾が命中しその場に倒れた。ちなみに死んではない。

総長「なっ・・・そんな・・・」

客A「わーーーー!!」

客B「ひーーーー!!」

バタバタバタバタ タッタッタッタッタ・・・

スーパーの客や店員は恐怖のあまり逃げていった。残ったのはライトロン、リンネス、サージルグ、総長、そして一部の構成員だけだった。

ライトロン「形勢逆転だなあ・・・」

リンネス「覚悟しなさいよ!」

総長「くそ・・・てめえのせいだぞ!!死にやがれ!」

サージルグ「えっ!?!」

総長はサージルグにむかって手に持っていた銃を発砲しようとした。だが・・・

ジユウウウツ スタツ

マスク・オブ・サン「ふっ、失敗したか・・・まあ最初から期待はしていなかったがな。でもいいセン
いってたじゃねえか。」

水蒸気になってやってきたマスク・オブ・サンによってふせがれた。

総長「「ブラックジーベン」三幹部、マスク・オブ・サン・・・」
ガタン ブルブルブル

総長は恐怖のあまり銃を落とした。

サン「そうか・・・写真でしか見たことなかったからな・・・」

ライトロン「マスク・オブ・サン・・・」

リンネス「何しに来たの？」

サン「なあに、この男の処刑をしたのだ。下部組織などゴミ同然だ。」

バツ ズバアツ

総長「ぐああっ!!!」

総長はアポロンロッドで斬られた。総長はその場で死んだ。

サン「フツ・・・」

リンネス「何やってんのよ!!!」

バサツ ギューーン

リンネスはサンに襲いかかった。

サン「馬鹿が・・・」

サツ ボンツ ボンツ

サンはアポロンロッドを前に突き出すと先端の日輪から火の玉が数
個放出された。

ギューーン スタツ

リンネス「くっ・・・」

リンネスは火の玉をよけると、これ以上は近づけないと判断し元
場所に戻った。

バキューン

サージルグ「当たれ!!!」

サージルグはライフルを構え、狙いを定めてサンに撃った。

サン「ん???フツ・・・」

バツ

サンは余裕の笑みを浮かべてよけた。

サン「お前新しい奴か・・・あまり「ブラックジーベン」に関わるなよ。ライトロン、リンネス、今回の所は見逃してやる。次に我々が来るまで、ま、のんびり待っているんだな。」

ジュウウウウツ

ライトロン「おい!くそ・・・また逃げられたか・・・」

リンネス「それよりも・・・ねえ!そのエナジースーツ!」

サージルグ「え?あ・・・」

タツタツタツ

2人はサージルグの元に駆け寄った。

ライトロン「さつきはすまなかつたな。担当直入に言うのもなんだが俺達の仲間にならねえか?」

リンネス「別に嫌ならいいけど・・・」

サージルグ「いや、いいよ。前からエナジースーツってのには興味あつたし。ていうか、君達2人は僕と同じ・・・」

リンネス「うん。同じ学校だと思っけど・・・」

ライトロン「とりあえず、変身とかねえ?」

ピツ バアアアン

3人は変身を解いた。3人の反応は・・・

香「うそっ、三島!?!」

隼人「三島とはな・・・」

治樹「烏丸・・・伊能・・・うそだろ!?!」

隼人「まあ本当はもう1人藤崎がいたんだが・・・」

香「今ちよつと別の用事でね・・・」

治樹「藤崎も!?あいつ他人事みたいに・・・」

隼人「ま、ゆつくり話そうか。何から話そうかな・・・」

これで「ヴァンデミエール」は4人になった

終

エナジースーツ紹介

「サージルグ」

装着者 三島治樹

能力 長距離からの射撃

外見 ロックマンエグゼのサーチマンのような感じ

energy6：アポロン

ハア〜

治樹（「ヴァンデミエール」に入ったものの、戦うってか〜）

治樹はあの時「エナジースーツには興味があつたし、別にいいよ。」
と言った。だが、こういつたことを次の日の朝になって後悔しだした。

正也「どうした三島？こんなに落ち込むなんてな。」

治樹「え・・・あ！いやいやいや、何でもないよ。」

「エナジースーツに変身したんだ」なんて言えるわけがない。笑われて終わりだ。

ガラガラガラ

香「おはよ〜」

香が来た。眠たそうだ。

治樹「あつ。」

治樹は香とたまたま目が合った。

キラーン

香の目が光った。

治樹「うわ〜」

治樹は結構びびっていた。

正也「おい、どうしたんだよ」

マスク・オブ・サン「総統。やはりあの「ヴァンデミエール」を倒すためには・・・」

???「我々三幹部が動き出さねば無理ということか・・・」

総統「エナジースーツの中でも抜きん出て強い組織だそうだな？」

???「某が出陣してやるつかの？」

???「いや、私が行こう。」

サン「マスク・オブ・ゴールドン様が！」

ここは、どこかにある「ブラックジーベン」のアジトである。玉座に座っている影で見えない男が総統。

そして、真ん中にいるマスク・オブ・サン。隣の隣にいるスフィンクスのような仮面をつけたマントの男が

マスク・オブ・オールデンである。

マスク・オブ・ゴールデン「大丈夫ですよ。私は最高幹部ですのにな。」

リンネス「またザコ・・・」

サージルグ「これでザコ？」

インバルト「そうだな・・・ザコだな。」

サージルグ「「ブラックジーベン」って強いんだろ？」

リンネス「何いってんのよ！？あの時のアンタ凄かったわよ？」

3人はちょうどB級組織を潰したところだ。B級の中でも相当ザコらしい。すると・・・

シュウウウ・・・サラア・・・

????「そらそうだ。お前らをおびき寄せるためのエサに過ぎんのでな。」

????「今日がお前らの最期だ。フッフッフ・・・」

スタッ　スタッ

3人の周りに金粉と水蒸気が飛び回った。そして金粉や水蒸気はそれぞれ一箇所に集まり、やがて金粉はマスク・オブ・ゴールデン、水蒸気はマスク・オブ・サンとなった。

インバルト「やはりそうか・・・」

リンネス「だれ？その金色の奴？」

サージルグ「こいつこの前の奴じゃん！」
ブルブルッ

サージルグは震えていた。

サン「お前はあの時のスナイパーか・・・どうやら我々と戦いつつもりだな。」

サージルグ「しょ、しょうがないだろ！」

サン「フツ・・・」

ゴールデン「私はマスク・オブ・ゴールデン・・・「ブラックジーベン」最高幹部である。」

リンネス「え！？」

マスク・オブ・ゴールデンは香の弟を殺した男だった。

リンネス「おまえ・・・ワタシの弟を！！」

バツ ギューーン

リンネス「クロス・・・ウイング・・・」

ゴールデン「・・・」

リンネス「ストラアイク！！・・・って、なっ！」

サツ ガキイイイイン

リンネスはクロスウイングストライクをゴールデンに仕掛けたがゴールデンは手に持っていた先端に髑髏のついてある棒・・・骸の杖で受け止めた。

ゴールデン「残念ですな。」

インバルト「くそっ！！！」

サツ ドウン・・・

インバルトはゴールデンに向かって衝撃波を出した。

サツ ボウン・・・

しかしそれはサンが出した火の玉と相殺した。

サン「フツ。」

バツ スタツ

シャツ

リンネスは上空に飛び上がると肩に付いてある羽根・・・リンネスフェザーを数本、2人に向かって投げた。

サン「ん？」

ゴールデン「何だ？」

キキイン

2人は何本かはそれぞれの武器で跳ね返したが腕や足などをかすっ

てしまった

リンネス「よしっ!!」

ギューン　ズバァン

サン「ぐあっ!」

リンネスは2人が呆気にとられている隙にサンを翼で斬った。サンはその場に崩れた

インバルト「今だ!」

ドウウウンツ

インバルトはゴールドデンに向かって衝撃波を出した。

ゴールドデン「おや?」

サツ　ビイイイツ

ゴールドデンは骸の杖の先端にある髑髏から赤いビームを出した。そしてそれは衝撃波と相殺した。

ゴールドデン「やはり一筋縄ではいかないようですね。フンツ!!」
バツ

髑髏「カカカカカカッ」

ビカーン　フワ……

ゴールドデンが念力を込めると髑髏が突然笑い出し、骸の杖から髑髏だけが浮遊した。

ユラアーイー　ビイイツ　ビイイツ

インバルト「なっ!クツ……」

リンネス「ええっ!?わっ!」

2人は髑髏の奇怪な動きとビームに驚いた。2人は必死に避けた。

しかし……

サン「フンツ、くらえ!」

ボウツ　ギョルルルル

インバルト「はっ!?しまった……」

リンネス「うわっ!くそ……」

体勢を立て直したサンが投げた火の輪によって2人は体勢を崩してしまった。

ゴールデン「よくやった。マスク・オブ・サン。」
カアアアアア・・・

罫體の口が開き、紫色の光線が発射されそうになった。しかし・・・
ビシッ ビシッ

ゴールデン「ん？」

銃弾らしきものが数発罫體に当たった。

リンネス「銃弾？まさか・・・」

インバルト「逃げたのかと思っていたが・・・」
はるか遠くでサージルグが撃ったのだ。

ゴールデン「マスク・オブ・サン、遠くで撃っている男を捜せ。」

サン「はっ。わかりました。」

ビシッ

また銃弾が飛んだ。

サン（今飛んできた銃弾の方向は・・・ななめ右か。）

バツ タツタツタツ

サンはサージルグがいるとされる方向へ走っていった。

キイーン

今度はサンの方に銃弾は飛んできた。

サン「やはりそこか。」

サンは火の玉を出そうとした。しかし・・・

ドオオオン・・・

サンの真下が爆発した。

サン「ゲッ！！地雷か！？」

タツ ジャキッ

サンの正面にサージルグがライフルを構えながら現れた。

サージルグ「その地雷は僕が仕掛けた・・・くらえええ！！」

バンツバンツバンツ ビシッビシッビシッ

サン「ぐわっ！！」

ドサッ

真正面で銃弾をくらい、サンは後ろに倒れた。

サージルグ（やっぱやればできるんだなあ。）

ボコツ　ゴオーーーーーッ

そう思っていたところに突如火柱があがった。

サージルグ「うわっ!!」

サージルグはまともにくらってしまったため、その場に倒れた。

バーン　ドサツ

サージルグ「くっ……」

サン「調子に乗りおって……」

カアアアアツ

サンの仮面が赤く光った。

インバルト「ん？火柱……リンネス、後は頼む。」

ダウン　バツ

インバルトは足にある衝撃波装置……シヨックレッグから衝撃波を放出し飛び上がりながらサージルグのもとへ向かった。

サン「くらえ……!!」

サージルグ「う……うわ……」

ビカアアアアツ

サン「アポロンシャイン!!!!」

サンの仮面から赤い光線が発射された。そしてそれはサージルグへと向かっていった。このままでは、サージルグに直撃だ。その時……

バツ　スタツ　サツ

インバルト「マクスインパルス!!」

サン「ん!？」

ドウウウウン……　ガガアアアアン……

サージルグをかばう形でインバルトが立ち、シヨックレットと構え、普通より数倍の威力を持った衝撃波を放出し、アポロンシャインと激突した。

ジリジリ……

サン「ぐううううっ……」

インバルト「くっ……」

威力は互角だがいつ折れてもいい状況だった。

インバルト「サージルグ、今だ……撃て。」

サージルグ「え？あ、ああ。」

ガチャッ ピツ ギュルルル

サージルグは腕のライフルに付いてあるボタンのうちの一つを押した。すると、ライフルから回転音が聞こえてきた。

サージルグ「スピニング……ファイヤー!!」

ダアン ギュルルルルズドオオン

サージルグが撃つと、回転する弾丸がサンの腹部を貫いた。

サン「うっ!!」

ガクッ

思わずサンは体勢を崩してしまった。

インバルト「ふっ……終わりだ……」

グアアアアッ ドバアアアアン!!!

サン「うあああああ!!!」

マクスインバルスを直撃でくらってしまったサンは思いっきり吹き飛んだ。

ズザザザアア……

サン「ハア……ハア……」

インバルト「負けたな……」「ブラックジーベン」幹部……マス

ク・オブ・サン。」

サン「フフフ……」

インバルト「何がおかしい？」

サン「幹部といったところで……総統に比べれば非力なものだ……私1人死んだところで……総統は何も思わない……」

ガクッ

マスク・オブ・サンは死んだ。Aクラスの犯罪組織には「殺し」が許可されていた。

インバルト「サージルグ……いや……三島。」

サージルグ「ん？藤崎……」
インバルト「犯罪者といったって……死ぬ姿を見るのは……や
っぱつらいな……」
サージルグ「ま、まあ……」

一方、リンネスは……

終

敵紹介

マスク・オブ・ゴールデン

武器：骸の杖 骸は空を飛ぶことができ、目からビームが出せる
外見：仮面はスフィンクスみたいでマントを羽織っている

energy：エネミー

リンネス「わっ！・・・うわっと！」

髑髏「カカカカカカッ・・・」

ユラーイー ビイッ ビイッ

バサッ バサッ

リンネスは髑髏を空中戦を展開していた。しかし、このままでは勝負が付きそうになかった。

マスク・オブ・ゴルドン「さて・・・」

グウウウウッ ビュン！！

ゴルドンは骸の杖をリンネスの後ろに向かって投げた。

リンネス「何で後ろなんかに！？」

ギウウウン ゲグツ

このまま骸の杖はどこか遠くへ飛んでしまいかとおもった。しかし、徐々に骸の杖はリンネスに、いや正確には髑髏に近づいていく。

ゴルドン「私の手から離すと、自動的に髑髏と骸の杖はくっつくようになっていくんですな。」

髑髏はリンネスの前にある。つまり、リンネスは髑髏と骸の杖にはさまれそうだったのだ。

ゴルドン「ちなみに挟まれてしまったらその時点で終わりなんですな。」

リンネス「クッ・・・」

バサッ バサッ

ユラーイー

リンネスがどこへ逃げても髑髏は追いつく。そして・・・
ゴルドン「さて、もうそろそろ帰りますかな。」

髑髏「カカカカカッ・・・」

リンネスは絶対髑髏と骸の杖に挟まれ、腹部を貫かれそうだった。

リンネス「くっ……」

リンネスがもう終わったと思ったとき……
ビシッ ビシッ

ドガアアン

インバルト「フッ……間に合ったか……」

サージルグ「はあく危なかった」

リンネス「よっしゃ!!」

ギューン

インバルトの衝撃波が鬨に、サージルグの弾丸が骸の杖に直撃し、少しの間ができた。その隙にリンネスは高速移動し、地上に降りた。ゴールデン「あなた方2人がここにいるということは、マスク・オブ・サンはもう死んだのですな？」

インバルト「そうだ。お前は何も思わないのか？」

ゴールデン「立派な戦力にはなっていたのですが……悲しみなどは微塵も。そういえば、その鳥の方の弟を殺したのは私ですが、あまり怒っているようすはないですな。」

リンネス「そんな実感が沸いてこないだけよ。確かに弟……翔は「ブラックジーベン」に殺された。でも、殺したところを見たわけでもないし、そりゃ弟が死んだことはとても悲しいけど何か……」

ゴールデン「翔……シヨウ……ああ、我々「ブラックジーベン」が結成の狼煙をあげようとどこかの道端の周りにいた人達を十字の形に切り裂いたときにそんな名前の子供がいましたよ。」

リンネス「じゃあ……やっぱり……」

ゴールデン「泣き叫ぶ姿を斬るのは面白い。たしか……そのときのあなたの弟は姉ちゃん姉ちゃんと叫んでいましたよ。」

リンネス「オマエエエエ!!!」

インバルト「やめろ！リンネス!!!」

シヤッ ブアッ

バツ スタッ

怒り狂ったリンネスは襲い掛かったが、ゴールデンは飛んでかわし

た。

ゴールデン「そう焦らずに。今日の所はここで退きましよう。それでは。」

サラアアアツ

ゴールデンは金粉になって消えた。

サージルグ「烏丸………」

リンネス「ハアツ……ハアツ……ハアツ……」

ガクツ

リンネスはよろめいた。

サージルグ「あつ！！烏丸！！大丈夫？」

インバルト「相当疲れているな……」

リンネス「あんたらは家族が死んだことがないから冷静でいられるの……」

インバルト「……そろそろ帰ろうか。」

マスク・オブ・ゴールデン「マスク・オブ・サン、やられました。」

総統「ほう、そうか。」

マスク・オブ・ゴールデンは基地に戻り、総統に報告していた。

「……マスク・オブ・サンがやられたとはな……相手もなかなかじゃな。」

総統「マスク・オブ・サンが死んだとて何も思わん。だが立派な戦力を失ってしまったのは事実。我々「ブラックジーベン」は全力をあげて、「ヴァンデミエール」とやらを潰さねばならん。」

「……つまり、総統が直に行かれるのですか？」

総統「ああ。そうだ。」

ゴールデン「しかし……何か策でも？」

総統「マスク・オブ・サンはやられた理由……それはチームワイクだ。」

正也「どうした三島？最近お前疲れてるぞ。」

治樹「野木は平和でいいなあ。」

最近の治樹は学校で弱音を吐くことが多くなった。

正也「ん？エナジースーツのことか？やっぱ戦うことってつらいのか？」

治樹「エナジースーツがすごい知ってるよな？」

正也「あ、ああ・・・」

治樹「でも敵の方がもっとすごいんだよ・・・」

正也「て、敵っていつたってテロ組織だろ？」

治樹「想像以上だったんだよ・・・」

正也「ふう〜っ。大変だな。」

元気がなかったのは治樹だけではなかった。

友達A「ちよつと香り、どうしたの〜？」

香「え、別に・・・」

香も元気がなかったのだ。いやどちらかといえば暗いと言ったほうが近かった。

治樹（やっぱり烏丸も落ち込んでるのか・・・）

そんな2人の姿を遠くで見えていた義景と隼人は・・・

隼人「いまになって落ち込まれてもなあ・・・」

義景「しょうがないだろう。だが「ヴァンデミエール」と「ブラックジーベン」の正面衝突は避けられない。マスク・オブ・サンがや

られた以上はな。」

隼人「ああ・・・」

終

それから三日ほど経ったある日の放課後・・・

義景「ん？三つ・・・」

いつものように義景がチェインジビジョンを見ると、Aランクの「ブラックジーベン」が三つの場所で活動をしていることがわかった。

義景（「ブラックジーベン」は今まであまり活動をしなかった・・・本格的といっても大規模な活動は下部組織に任せていた・・・一体・・・）

義景はすぐにこの事を隼人、香、治樹に知らせた。ちなみにチェインジビジョンにはメール機能が付いている。

そして4人はコンビニの前で待ち合わせた。

隼人「三つの場所で活動か・・・」

香「あつ、そういえば、ここだけ活動範囲が広いな。」

香が指したB地点だけは活動範囲が広がった。

治樹「人が多いからじゃないのか？」

義景「つまり・・・残りのA地点、C地点は少人数で活動を行っている。幹部がいる可能性が高いな。」

隼人「じゃあ、俺はA地点に行く。三島と藤崎は1人幹部倒してんだから、幹部がいなさそうなB地点。烏丸は・・・」

香「待つて！？A地点って確か・・・」

義景「どうかしたのか？」

香「翔が殺された場所に近い・・・お願い！ワタシをA地点にいかせて！？」

隼人「あ、ああ・・・ていうことは俺はC地点か・・・」

治樹「僕はB地点に行くんだな。」

義景「ああ。伊能が勝手に決めただがな。」

隼人「別にいいだろ？ていうか最近俺あんまりこれといった戦いでないからな……」

義景「よし……それじゃ解散!!」

一番速くに着いたのは隼人だった。隼人はC地点の近くで……
ピッ ピッ ピッ

energy

隼人「ライトロン!」

ピピピピピッ カアアアッ ジャキーン

ライトロン「よしっ!」

ライトロンに変身した。

ダッ

そしてC地点へと向かった。ちなみにC地点は公園だ。

ライトロン「ん……?誰もいないな……」

???「どこを見ておる。」

バッ

ライトロンが後ろを振り向くと、そこには鋼鉄の鎧に身をかためた男が立っていた。そして顔には特徴的な仮面があった。

ライトロン「おまえは……」「ブラックジーベン」か?」

???「わしの名はマスク・オブ・アイゼン。「ブラックジーベン

」守護隊長だ。」

ライトロン「その鎧は……」

マスク・オブ・アイゼン「この鎧は……体の一部だ。」

ライトロン「え……」

バサッ タンッ

リンネス「ふうっやっと着いた……」

リンネスが向かったA地点は出発点から最も遠かったため時間がかった。ちなみにA地点は歩道だ。

リンネス「いるんでしょ!?マスク・オブ・ゴールデン!!」

そして、そこには・・・

サラア・・・スタンツ

マスク・オブ・ゴールドン「ごきげんよう・・・

リンネス「やつぱり・・・!!」

ゴールドン「インバルトやライトロンだったら『ごきげんよう』と返してくれると思っていましたが・・・あなたなら無理ですな。」

義景「ここか・・・」

治樹「なんか物騒だな・・・」

いつぱう義景と治樹の2人はB地点に到着した。どうやら人気のない空き地のようだ。

義景「とりあえず・・・」

治樹「うん、変身しよう。」

ピッ ピッ ピッ

ピッ ピッ ピッ

energy

energy

義景「インバルト・・・」

治樹「サ、サージルグ!」

ピピピピピッ カアアアッ ジャキーン

ピピピピピッ カアアアッ ジャキーン

2人は変身した。

サージルグ「ん・・・そこか!？」

ドウツ ビシツ

????「がはっ!・・・」

ガクンツ・・・

変身して早速サージルグは何者かの気配を感じ、その場所にライフルを撃った。すると隠れていた全身黒で顔に十字の仮面を付けてある男が銃弾を喰らって倒れた。

サージルグ「何だ!？」

インバルト「おそらく「ブラックジーベン」の構成員だろう。もし
かしたら、もう・・・」

インバルトが何かを言おうとしたその時・・・

ザッ ザッ ザッ

構成員A「フッフ・・・」

構成員B「ハハハハ・・・」

構成員C「クツクツク・・・」

ぞろぞろと構成員たちが2人を囲んだ。

インバルト「もう、囲まれていたか・・・」

サージルグ「どうすればいいんだ・・・」

最終決戦 始まる

終

energy9:ウィップ

ライトロン「そもそもお前達は人間なのか？」

マスク・オブ・アイゼン「・・・元々はな。」

ライトロン「元々って・・・」

サツ

アイゼンは三叉槍を構えた。

アイゼン「そちは戦いに来たのだろ？早く構えろ。」

ライトロン「えっ・・・」

アイゼン「構えろ。」

ライトロン「構えろったって、俺はあんまり武器は使わないんだよな。」

サツ バリイイイッ

アイゼン「ん？」

バチイイイッ

アイゼン「ぐわあああつ！！」

アイゼンは直撃を喰らった。

ライトロン「モロだな。」

アイゼン「ええ、確かに。」

ライトロン「え？あんまり効いてない。」

アイゼン「この鉄の鎧はあまり電気を通さぬ。悪いな。」

ライトロン「ちっ・・・」

アイゼン「今度はこちらから行かせてもらっぞ。」

ダンッ シュッ

アイゼンは三叉槍を繰り出してきた。

サツ バリバリッ

ライトロン「エレクトロソード！！」

それに対してライトロンはエレクトロソードで対抗した。

キンキンキンッ ブンッ ガキンッ シュッシュッシュッ

2人の攻防は一進一退だった。ここでライトロンが

ライトロン「エレキウィップ!!」

ヂイッ　ヂイッ

ライトロンはエレクトロソードの刃である電撃を鞭のようになやかにしてアイゼンに繰り出した。

アイゼン（鞭・・・か・・・）

バツ

ライトロン「そこだぁ!!」

ビュッ　バヂイッ

アイゼン「ぐっ!!」

アイゼンはかるうじて避けたがすぐに次の一撃が待っていた。

ライトロン「よしっ!!」

ビュン　グルル・・・バリイイッ!!

アイゼン「グアアアッ!!」

ライトロンは鞭をアイゼンに巻きつけ、電撃を浴びせた。

アイゼン「グウウウ・・・」

ガクンッ

アイゼンは膝をついた。勝負はライトロンが明らかに優勢だ。しかし・・・

ライトロン（おかしい・・・あまりに弱すぎる・・・）

ライトロンは心配していた。

アイゼン「ふっ、強いな。」

アイゼンは立ち上がった。

ライトロン「お前、本気を出してないな。」

アイゼン「出してほしいのか。」

ライトロン「やっぱり本気を出してなかったんだ・・・出さないのか？」

ヒュン　バシイイッ

ライトロン「ぐあっ!!」（何があったんだ!!何も見えなかったぞ・・・）

アイゼン「今から本気を出そうと思っていたところなのだ。」
彼の手には鞭が握られていた。

ライトロン「鞭……だと……」

アイゼン「ああ。鉄の高度を持った鞭……柔鉄鞭だ。」
ヒュッ

そう言うとアイゼンは柔鉄鞭を振った。

ピシィ バシィィッ

ライトロン「ぐあああっ!!」

ライトロンは一撃目はかわしたが二撃目は肩に直撃した。

アイゼン「鞭祭……」

バシッ ビシッ ピシピシピシピシッ

柔鉄鞭が容赦なくライトロンに襲いかかる。

ライトロン「……!!」

ガクンッ……

ライトロンは何も言わずその場に倒れた。

ライトロン「全く……見えない……」

アイゼン「随分使い込んだ鞭なのだ。そろそろ死んでもらおう。」
サッ

アイゼンは三叉槍を構えた。

アイゼン「この槍は……止め用にある。」

バシユユッ ゴー……

三叉槍の刃はミサイルだったのだ。一直線にライトロンに向かってくる……

ライトロン（ちくしょう……）

一方A地点

バサッ

リンネス「くらえ!」

シャッ

リンネスは空からリンネスフェザーを出した。しかし・・・
マスク・オブ・ゴールデン「ふっ・・・前は油断しましたが、今度
は通じませんよ。」

髑髏「カカカカカツ」

ビィィイツ ボウツ ボウツ

ゴールデンは骸の杖の髑髏から赤いビームを出した。ビームはリン
ネスフェザーと相殺した。

ゴールデン「さて、そろそろいきますか。」

バツ

髑髏「カカカカカツ」

フワ・・・ ユラ〜

ゴールデンは髑髏を浮遊させた。

リンネス（来た・・・）

バツ バサツ

するとリンネスは急降下し、ゴールデンの頭と同じぐらいの高さで
飛行しだした。

ゴールデン「何の真似ですか？」

リンネス「おまえのその戦い方は離れた敵に対してするものでしょ。

」

ゴールデン「ほう・・・なぜそう思われるのです？」

リンネス「あの髑髏の目から出すビーム、あれここで放つたらおま
えも危ないよね？」

ゴールデン「ほう・・・よく気づきましたな。」

カシヤン

ゴールデンは髑髏を骸の杖に戻した。

リンネス「小細工なしの勝負ができそうじゃない？」

ゴールデン「空中戦が得意のリンネスが一騎打ち・・・珍しいです
な。」

リンネス「それは勝手にでしょ？」

シャキィィン

リンネスは手の甲から爪を出した。
リンネス（翔・・・敵は絶対取るからね・・・）

終

敵紹介

名前：マスク・オブ・アイゼン

所属：ブラックジーベン

武器：三叉槍

柔鉄鞭

外見：全身鉄の鎧で顔に仮面がある。

energy10:アイゼン

B地点・・・リンネスVSマスク・オブ・ゴールドデン
ガキンツ　ギンツ

リンネス「フンツ！！ハアツ！！」

マスク・オブ・ゴールドデン「フン・・・」

2人の一騎打ちは始まったばかりである。

バサツ

リンネス「ハツ！！」

リンネスは飛び上がった。

ギューーーーン

リンネス「クロス・・・ウイング・・・」

ゴールドデン「いちど破った技ですな。」

リンネス「ストラアアイク！！！」

ギイイイイン！！！！

ゴールドデン「残念ですな・・・と前も言いませんでしたかな??」

ゴールドデンは前と同じように骸の杖で受け止めた。

リンネス「・・・ハアツ！！！」

バサツ　グルンツ

リンネスは再び飛び上がり、ゴールドデンの背後を取った。

ゴールドデン「何・・・!?!」

リンネス「バツク！！」

ズバアアツ

ガクンツ

ゴールドデン「むうううっ・・・」

ゴールドデンは始めて膝をついた。

リンネス「油断したわね・・・」

ゴールドデン「背中をついてくるとは・・・意外とお強いようですな。」

┌

リンネス「てつきりその余裕の口調も無くなるとおもったんだけどね。」

ゴールドデン「私はいつも余裕ですよ。あなたが私に一撃浴びせたところでどうということはありませんな。」

リンネス「え・・・？」

フワッ・・・

ゴールドデンは宙に浮いた。

ゴールドデン「驚くのはこれを見てからですよ・・・分裂ディヴァイジョン・・・」
ドヒュッ

リンネス「うわっ!？」

リンネスに何かが飛んで来た。リンネスはとっさによけた。

リンネス「うそ・・・腕・・・？」

それは腕だった。

ゴールドデン「前に戦った時・・・この骸の杖ごときに苦戦していましたが・・・大丈夫ですかな？」

リンネス「何だと!」

バサッ ギューーン

リンネスはゴールドデンに襲いかかった。しかし・・・

ゴールドデン「フフ・・・」

バアッ ヒュンヒュンヒュン

リンネス「うわああああっ!!!!」

ゴールドデンがマントを広げると、腕や脚が飛んで来た。

ビュッ ドガッ

リンネス「くっ!」

リンネスは脚に蹴られた。

ゴールドデン「どうやら苦戦のようですね。」

ビィィィッ バチィィッ

リンネス「グワアアッ!」

ゴールドデンは目からビームを出した。ビームはリンネスに直撃した。
リンネス（くそお・・・どうすれば・・・）

C地点・・・ライトロンVSマスク・オブ・アイゼン
バシュツツ　ゴーーーー

マスク・オブ・アイゼンが出したミサイルが一直線にライトロンに向かってくる・・・

ライトロン（切り札を出すか・・・）

スウ・・・　パリツ　ズドオオン

ライトロンは人差し指をミサイルに向けると、小さな電気が放たれ、ミサイルが爆発した。

アイゼン「な、何だ！？何をしおった！？」

ライトロン「フツ、静電気だ・・・」

アイゼン「何・・・静電気だと・・・??」

パリツ　ズドオオン

アイゼン「ぐつ！！・・・この鉄の鎧を突き抜けるとは・・・」

アイゼンは肩をおさえた。

ライトロン「光はお前の鞭より断然速いよなあ・・・」

アイゼン「何を・・・」

アイゼンは鞭を振ろうとしたが・・・

ライトロン「貫電かんでん！！」

パリツ　ズドオオン

アイゼン「ぐはあぁっ！！くそぉ・・・」

アイゼンは静電気を胴体に喰らい、腹を押さえながらフラフラになっていた。

ライトロン「直接お前らに恨みはないが・・・悪いな。」

スウ・・・

ライトロン「百電もてん！！！！」

パリパリパリパリツ　ズドドドオオン

アイゼン「・・・がはっ！！」

ドサアッ

アイゼンは倒れた。まだ死んではない。

ライトロン「お前・・・元々人間なのか？」

アイゼン「そうだ・・・我々「ブラックジーベン」は貴様らが今使っているエナジースーツに・・・ハア・・・疑問を持った者の集まりなのだ・・・ハア・・・ハア・・・」

ライトロン「エナジースーツの??」

アイゼン「ああ、そうだ・・・そんな物作るぐらいなら・・・いっそ軍隊でも作ってしまった方がいい・・・」

ライトロン「極端なタカ派の集まりだったのか・・・その身体には自分から望んでなったのか？」

アイゼン「総統のお力であ・・・フフ・・・フフ・・・ハハハハハ・・・」

ライトロン「何かおかしなことでもあったか？」

アイゼン「B地点にいるお前の2人の仲間のことだ・・・」

ライトロン（藤崎と三島のことか・・・）

アイゼン「あの2人は・・・マスク・オブ・サンを殺した者として総統が直々に消すつもりだ・・・お前らが・・・言っても・・・無駄だ・・・フフフ・・・」

ガクッ

アイゼンは息絶えた。

ビリイッ

ライトロン「くっ!!」

ライトロンは突然しびれた右手をおさえた。 静電気の副作用だ。

ピッ バアアアン

隼人（2人が心配だ・・・行くか・・・）

ダッ

隼人は変身を解くとすぐにB地点に向かった。

終

energy11:スピン

A地点・・・リンネスVSマスク・オブ・ゴールドン
マスク・オブ・ゴールドン「フッフッフ・・・」

ゴールドンは分裂している両手からビームを出した。

フワツ・・・ビィィィツ

リンネス「くそっ!!」

バサツ

リンネスは避ける。

ゴールドンの猛攻撃はまだ続いていた。

リンネス（何も攻撃できない・・・でも・・・あいつは翔の仇・・・
絶対に・・・勝つ!!）

バツ

リンネスは腕を上にあげた。

ゴールドン「何のマネですか?」

キュルキュルキュル・・・ギョルルルルツ・・・

するとリンネスはドリルのように回転を始めた。

リンネス「ロツク・・・ウイング・・・」

ゴールドン「一体・・・」

リンネス「スピニィィィング!!!」

ギョルルルルツ・・・

リンネスはゴールドンの胴体に向かっていった。

ゴールドン「いたって直線的ですな・・・」

フワツ・・・ビィィィツ

ゴールドンは分裂してある両手と骸の杖からビームを出した。しか
し・・・

ヂィツ ギョルルルルツ・・・

ビームは回転によってはじかれた。

ゴールドン「ほう・・・」

リンネス「これで終わりよ!!」

ギョルルルツ・・・ズボツ・・・

リンネスは胴体を貫いた。リンネスは勝利を確信した。しかし・・・ガチャ・・・

ゴールデンの胴体から首が外れた。そして油断しきって回転を解いていたリンネスに・・・

ビィィツ バチィツ

リンネス「ぐわあっ!!何で!?!」

ビームをお見舞いした。

ゴールデン「フッフッフ・・・私の本体は胴体ではなく・・・この頭部なのです。

フワツ・・・

骸の杖がゴールデンの前に現れた。そして・・・

髑髏「カカカカカツ・・・」

カパツ ゴゴゴゴゴ・・・カアアアツ

ゴールデン「紫光しうくわう・・・」

髑髏の口が開き紫色のビームを放出した。ビームは一直線にリンネスに向かっていく。

リンネス「はっ!もう避けられない・・・やるしかない!!」

バツ ギョルルルツ・・・

リンネス「ロツク・・・ウイング・・・スピニィィング!!!」

リンネスは回転し紫光に突撃していった。

バチチチチィィィ・・・

互いに押しつ押されつの状態だが明らかに不利なのはリンネスだった。

リンネス（負けるわけには・・・いかない!!）「うあああああああああっ!!!」

ギョルルルツ ガガガガガツ

リンネスは回転速度を上げ紫光を弾き飛ばした。そして・・・

リンネス「これで・・・終わりだあああっ!!!」

ゴールデン「そんな・・・」

ギョルルルルツ バキンツ ズドツ

リンネスはそのまま突撃し骸の杖とゴールデンの頭部を貫いた。

ゴールデン「私もここまでのようですな・・・それも・・・よいでしょう・・・」

ドサツ ドサドサドサツ

ゴールデンのありとあらゆる部分が地面に落ちていった。

リンネス「ハアハアハア・・・仇・・・とつたよ・・・」

スタンツ ピツ バアアアン フラツ・・・ドサツ・・・

リンネスは地面に降り立ち変身を解くと、その場に倒れた。

香（体が・・・動かない・・・）

香は意識を失いそうになった。しかし・・・

トントントン

???「おい！！起きろ烏丸！！」

香「え・・・？」

香が目を開くと伊能が立っていた。

伊能「お前も幹部を倒したようだな。」

香「お前もつてことは・・・」

伊能「ああ、俺もだ。」

香「じゃあ、あの2人も・・・」

伊能「あいつら、まだ戦ってるぞ。」

ピツ ヴォン

伊能はチェインジビジョンのとあるボタンを押した。すると画面に地図のようなものが出てきた。

伊能「赤い点が4つあるだろ？このA地点にある2つが俺達、B地点にある2つが藤崎らだ。おそらくまだB地点から動いていないからまだ戦っていると思う。そして2人でなおかつ苦戦しているということは・・・」

香「ワタシ達が戦った敵よりも・・・」

伊能「ああ、強いということになる。お前どうする？俺は助けに行

くけど。」

香「ワタシ・・・今、全然動かないから先にいつてくれない？後で行くから。」

伊能「わかった。後でこいよ。」
タツ

伊能は走っていった。

香「さあ、行くか！」

香はトボトボと歩いていった。

「ブラックジーベン」アジト・・・

・・・マスク・オブ・ゴールデン、戦死イタシマシタ・・・
機械がそう伝えた。

総統「そうか・・・とうとうゴールデンまで死んだか・・・」

B地点・・・

インバルト「ショックガトリング!!」

ドドドドド・・・

構成員たち「「「「ぐあああつ!!」「」「」

ドササ・・・

サージルグ「くそー!!」

ガチャ ガガガガガッ

構成員たち「「「「ぎゃああああつ!!」「」「」

ドササ・・・

ゾロゾロゾロ・・・

構成員A「なかなか倒れねいな。」

構成員B「まあ後少しさ。」

インバルト「ハアツハアツ・・・くそつ・・・ハアツ・・・キリがないな・・・」

サージルグ「フウツ・・・フウツ・・・どれだけいるんだ・・・」
エナジースーツは長い時間戦闘をすると疲れてしまう。今2人は構

成員たちを50人ほど倒している。普通のテロ組織は10人ぐらいで構成されるが、「ブラックジーベン」は50人倒されても尚現れてくるのだ。

構成員C「そ、そろそろ総統が来られるぞ!!」

構成員D「な、何だと!あ、ああ・・・」

ゴーーーーッ

構成員たちの周りに黒い煙が立ち込めた。

インバルト「そ・・・総統・・・?」

サージルグ「この状況で・・・?」

シューーーーーッ バッ スタッ

煙が一箇所に集まると、そこから1人の男・・・総統が姿をあらわした。

総統「ここはお前達を誉めるべきなのか・・・?」

構成員E「総統閣下!!申し訳ありません!!この2人、なかなかしぶといようで・・・」

総統「幹部は全員死んだ。お前達が苦戦するのも無理はない。」

構成員F「アイゼン様やゴールデン様が・・・」

総統「お前達はアジトに帰っている。後は私がやる。」

構成員たち「oooooooooooo」

タッタッタッタッタ

構成員たちは帰っていった。

総統「100人以上もの我が構成員たちを倒すとはな・・・」

インバルト「このエナジースーツあつてこそだな。」

サージルグ「ま、まあそうだな。」

総統「エナジースーツか・・・私は元人間だ。」

インバルト「何?」

総統「私は数ヶ月前・・・ある奇跡をこの目で見た。見た瞬間、私の心の奥に秘めていた狂気が目覚めた。」

サージルグ「そ、その瞬間っていうのは・・・?」

総統「エナジースーツ誕生の瞬間だ。」

終

energy12：エスケープ

総統「私は元々政府の科学者だった。そしてエネルギーを創ったのだ。」

サージルグ「お前が創ったのか？」

総統「正確に言うと私を含んだ十数名の科学者たちだ。そしてこの目で様々なエネルギーを見た。私は正直怖かった・・・こんなに恐ろしい力を我々は生み出したのだと思うようになったのだ。そして私の中に狂気が生まれた。この能力チカラさえあれば世界を手にする。ことだつて不可能ではない、そう思うようになったのだ。」

インバルト「それで「ブラックジーベン」を結成したのか・・・」

総統「その通りだ・・・エネルギーは元々、人間が変身する、という前提の元で創られた。だが私は、人間が進化する、そういう能力を「ブラックジーベン」結成後創ったのだ・・・」

サージルグ「それがあの幹部たちか・・・」

総統「そうだ・・・マスク・オブ・ゴールドン・・・マスク・オブ・サン・・・マスク・オブ・アイゼン・・・そいつらは全員、私が進化させてやったのだ・・・だが勘違いするなよ。あの3人は自ら望んで進化したのだ・・・」

サージルグ「自ら・・・望んで・・・」

インバルト「進化だと？」

総統「そして私も・・・進化した・・・」

インバルト「さつきから進化進化というが、ただの人体改造じゃないのか。」

総統「まあ、そうとも言えるかもしれん・・・それにしても・・・我が幹部は全員お前らに敗れた・・・完全に進化しきれなかったというわけか・・・」

サージルグ「それで敵討ちつてわけか？」

総統「それもあるな。だがそれだけじゃない。この後、私が新しい

進化を創るに至って……お前らは目の上のたんこぶなのだ。」

シヤキイイン

総統は腰の剣……滅刀を抜いた。刃は黒ずんでいた。

ザザツ

2人は構えた。

総統「見せてやろう……これが進化というやつだ……闇滅……」

ダイクエスケープ

┌

ヒュンツ

総統は滅刀をなげた。

インバルト「ふん……」

サージルグ「よつと!!」

2人はかわした。そして……

ドスツ

構成員A「ぐはああつ!!総統……何を……」

後ろの構成員に刺さった。

2人「えっ!?!」

総統「よく見ている……」

ズズ……ズズズ……ザアアツ……

構成員A「うわあああああつ!!!!」

構成員の体が消滅した。

インバルト「何だ……今のは……」

総統「この滅刀にはあらゆるものを消滅させる力を持つ……エナジースーツはどれもこれも生易しい。人の体一つ、消滅することができないのだからな。」

構成員たち「……う……うわ……うわ……うわあああつ!!!!!!」

┌┌┌┌

ダダダダダツ

構成員たちは逃走した。

総統「逃げたか……まあいい。次はお前らだ。」

タツタツタツ ガシツ スツ……

総統は滅刀を拾い、剣先を2人に向けた。

サージルグ「ち、畜生！！くらいやがれ！！」
ガチャ ドガガガガッ

サージルグは腕にあるライフルで総統を撃った。

総統「ふん……」

バツ タツタツタツ

サージルグ「なっ……！！」

総統「くたばれ……」

総統は弾丸をかわした。そしてサージルグに向けて滅刀で斬りかかろうとした。

インバルト「危ない！！」

バツ ガキイイイン

インバルトはサージルグを庇う形で、ソニックブレードで受け止めた。

サージルグ「す……すまない。」

ジリジリ……

総統「何だこれは……衝撃波の刃か……だがいつまで耐えられるかな？」

ザアアアッ

ソニックブレードがだんだん消滅してきた。

インバルト「……クッ！！！！」

ガキイイイイン ザザアッ

インバルト「くらえ！！シヨック ！！」

サツ ドウウン……

インバルトは総統と間を離し衝撃波を総統に向けて放出した。ちなみにシヨック とは一直線状に発射される衝撃波で、まるで光線のようなものである。

総統「滅びよ……」

ブウン…… ザアアアッ……

総統が滅刀をシヨック に向けて振るとシヨック が消滅した。

総統「無駄だ……この滅刀はあらゆる物質を消滅させる。どんな攻撃をしても無駄だ……」

ザッ ザッ ザッ

インバルト（滅刀か……厄介な武器だ……）

総統が歩み寄ってきた。しかし……

ボカアアアン

総統「ぐおっ！！何だ……」

総統の足元が爆発した。

サージルグ「意外と無駄じゃなかったよ。」

爆発したのはサージルグが仕掛けた地雷だった。

インバルト「ふっ……でかした……シヨック ！！」

サッ ドウウン…… ドガアアン

総統「ぐあああっ！！」

地雷に怯んだ総統にインバルトはシヨック をお見舞いした。

総統「く……くそ……」

インバルト「自分の能力を過信したな……お前の持つてるその武器以外が何ら他のエナジースーツと変わりはない……」

サージルグ「戦い方によってはお前なんてたいしたことないかもよ。」

「
総統「ふん……これぐらいで調子にのるな……」

スクッ

総統は立って反撃しようとした。その時……

バリイイツ

総統「なっ……何だ！！」

バチイイツ ザアアアツ

総統に向けて電撃が向かってきたのだ。総統はなんとか滅刀で防いだ。

ライトロン「何だ？あの武器??」

インバルト「ライトロン……」

ライトロン「待たせたな……」

サージルグ「リンネスは??」

ライトロン「結構深手だったからな。ま、そのうち来るだろう。」
インバルト「そうか。」

総統「お前がマスク・オブ・アイゼンを倒したのか・・・」

インバルト「ああ。結構強かったぜ。」

総統「あと1人揃えば「ヴァンデミール」が揃うということか。」

インバルト「お前の負けだな・・・」

総統「何??」

ライトロン「「ヴァンデミール」が全員揃ったら、お前何か敵じやねえよ。」

総統「ほう・・・その言葉、おぼえておけよ。」

総統との戦いは新たな局面をむかえていた。

終

敵紹介

「ブラックジーベン」総統

武器 滅刀

外見 全身が黒い装甲で固められている

energy13：エンド

総統「ならば「ヴァンデミール」が全員揃う前に潰せばいいわけだ・・・」

ライトロン「へっ、揃わずとも・・・ハアア!!」

インバルト「フン!!」

サージルグ「ウオオオオツ!!」

バリイイツ ドウウン ドガガガガツ

三人の波状攻撃が総統に襲い掛かる。

総統「・・・」

ドスツ

総統は滅刀を地面に突き立てた。そして・・・

ザアアアツ

三人の放った電撃・衝撃・銃弾がすべて消滅した。

総統「エスケイプエリア地域消滅・・・この能力のどこがお前らエナジースーツと同

じだというのだ??」

サージルグ「・・・うそだろ?・・・」

インバルト「怯むな、サージルグ。行くぞ!!」

ライトロン「ああ!!」

サージルグ「う、うん・・・」

インバルト「ソニックブレード!!」

ライトロン「エレクトロソード!!」

二人はそれぞれの剣で総統に立ち向かった。

総統「エスケイプエリア地域消滅・・・」

インバルト・ライトロン「わっ!!」

二人は目の前の滅刀から離れた。そして総統の左右にまわった。

総統「くっ・・・」

グツ ズボツ

総統は滅刀を構えた。

ライトロン「滅刀を手に持つてる時はさっきのように大規模な消滅はできない!!」

インバルト「自分も消滅してしまうからだ!!」

ギイイン・・・

二人の剣が滅刀にふれた。刃が少し欠けていたが。すぐに直った。

インバルト「この刃はエナジーで作った刃・・・すぐ元に戻る。」

ライトロン「おまえがいくら消滅させようが俺達のエナジーが続く限り、元に戻るってわけだ。・・・オラアアアッ!!」

ガギッ！ ギイイン！

2人の剣が容赦なく総統に襲い掛かる。しかし・・・

ギイイン！ ドサッ ドサッ

2人は倒れた。

総統「口ではそう言いながらも妙に慎重だな。そうか、これまで幹部たちと戦ってきたダメージで体力が持たんのか。お前らの言うエナジーとは体力。疲れとともにエナジーもなくなっていくというわけだ・・・」

ライトロン（あいつ・・・剣術も強い・・・）

インバルト（刃の再生後2、3回が限界・・・どうすれば・・・）

一方、サージルグは・・・

サージルグ（一体・・・どうすれば・・・）

カタカタカタ・・・

サージルグは怯えていた。すると・・・

リンネス「サージルグ。サージルグ。」

木の陰に隠れたリンネスがこっそりサージルグを呼び出した。

サージルグ「リンネス・・・いつからいたんだ？」

リンネス「さつき来たばかりよ・・・それよりワタシ、作戦思い

ついたから、手伝ってくれない？」

サージルグ「あ、ああ・・・で、どうするんだ？」

ギイイン！ ガキッ！

インバルト「ハア・・・ハア・・・」

ライトロン「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

総統「この2人しぶといな・・・だがもう終わりだ。」

総統が剣を大きく振ったその時・・・

ギューン・・・

リンネス「クロス・・・ウイング・・・ストラアイク!!!」

バサアアアッ!!!

リンネスが三人の間を割って入るようにならわれた。

ライトロン「リンネス・・・ケガは大丈夫か？」

リンネス「もう大丈夫だ・・・」

総統「4人目が来たか・・・」

ドスッ!

インバルト「!!!!」

ライトロン「!!!!」

リンネス「・・・」

総統は、さっきのリンネスの突撃によってできた間合いを利用して、
エスケープエリア地域消滅を仕掛けるつもりだった。

総統「間合いはとった・・・エスケープエリ・・・」

サージルグ「スピニングファイヤー!!!」

ズドオオン!

総統「グアアアッ!!!な・・・なにい!!!」

リンネス「エスケープエリア地域消滅を使うとき、お前は無防備になるのさ!!!」

ライトロン「よっしゃ!!!インバルト、止めは任せた。」

インバルト「ああ・・・マクスインパルス!!!」

ドウウウン・・・ ガガアアアッ!!!

総統「グ・・・グアアアアアッ!!!!!!!」

ドサッ・・・

総統は直撃を喰らい、倒れた。

総統「15才のガキ4人に・・・「ブラックジーベン」を壊滅させられるとは・・・だが、覚えておけ、いずれ、エナジースーツ同士

で、殺し合いが起きるとな・・・」
ガクッ

総統は死んだ。「ブラックジーベン」壊滅・・・
ライトロン「ついに倒した・・・」

インバルト「B級組織・・・」「ブラックジーベン」・・・」
サージルグ「リンネス・・・もう弟の仇はとつたんだろ？じゃあ・・・」

インバルト「「ヴァンデミール」を・・・抜けるのか？」
リンネス「ま、考えておくわ。」

4人は変身を解き、それぞれの家に帰った。

第一部 完

敵紹介

「ブラックジーベン」総統

武器 滅刀

外見 全身が黒い装甲で固められている

第二部 プロローグ

日本政府が守口市の中学3年生にのみ与えた力、エナジースーツ。エナジースーツの力を得たものは能力者と呼ばれる。能力者たちは、首都大阪にいる数々のテロ組織を倒していった。そして・・・ある軍団が大型組織「ブラックジーベン」を壊滅させた・・・その軍団の名は「ヴァンデミエール」。日本政府は「ヴァンデミエール」の内、インバルト⇨藤崎義景とライトロン⇨伊能隼人に「列強」という称号を与えた。「列強」とは、B級組織を倒した者などに与えられる称号で、国際テロ組織などのA級組織と戦う権利を持つことができる（普通の能力者はB級組織までとしか戦えない）。「列強」はもう一人いることはいるが、彼は別格だった。だから、彼以外での「列強」が出てきたことは、他の能力者にとって衝撃の出来事だった。そして、能力者たちは第四、第五の「列強」になるために動き出した・・・

登場人物（随時更新）

光和学園

3年1組

藤崎義景⇨インバルト 「ヴァンデミエール」所属

本が好きでしゃべり方は小説家のよう。「列強」の一人

野木正也

何かとエナジースーツに縁のある男。

三島春樹⇨サージルグ 「ヴァンデミエール」所属

転校生でちょっと臆病。

烏丸香⇨リンネス 元「ヴァンデミエール」

弟を「ブラックジーベン」に殺され、復讐に燃えていた。

登呂津獅朗セドルフ
浦地と共に行動する男。

3年2組

伊能隼人ライトロン 「ヴァンデミエール」所属
成績がよく、家柄も良い。好戦的。「列強」の一人。

栄己興ボナパルト 「ロドプロテクター護国卿」所属

野木とは小学校からの友達。「列強」の一人。

座原鋼健ジユガシヴ

興と流堂に革命が起きると伝えた男。元「ポリシェヴィキ」だったが、「列強」になったことを機に裏切る。

尾津弓香デユナーク

興が気になっている女の子。

岩国隆二アイゴイル 「ロドプロテクター護国卿」所属

弓香の幼馴染で、誰よりも弓香を想っている。

連谷縁也エグゼス

鋼健の友達で小柄。

3年3組

九条流堂パトリカス 「ナイトハインス」所属

言葉遣いが丁寧な美男子。「列強」の一人。

浦地零バズグ

革命思想を持つ男。能力者たちを自分の支配下に置くことで能力者の頂点に立とうとしていたが、鋼健の裏切りにあい、「ポリシェヴィキ」は崩壊し、自身はリタイアする。

宇田茂琉ロスノフ 「ナイトハインス」所属

弓香の元彼。

3年4組

帝塚王史バドガイザ

日本政府の大物の息子で、成績は群を抜いてトップ。通称「帝王」。
最初に「列強」になった男。

真華学園

沢田紅貴「???」

学園内最強の肩書き、主席の名を持つ男。

来島周「???」

総司令。紅貴が信頼を寄せている。

江島藍「ステーナ

側近。「模範戦闘」外で行動を起こした。

少田劉「???」

遊撃隊長。紅貴とは対立している。どこか飄々とした男で皮肉を言う。

登章平「???」

遊撃参謀。冷静沈着。

林虎三「ジユゲン

幕僚長。大きな声で笑う。「強き者につく」ことがモットー。

第二部 プロローグ（後書き）

はじめまして、ラスプーチンです。第一部はどうでしたか。意見や感想があればどしどし下さい。さて、第一部では能力者と犯罪組織との戦いがメインでしたが、これからはじまる第二部では、能力者同士の戦いがメインとなります。更に、新しい登場人物もたくさん登場しますので、よろしくお願ひします。

energy14: トップ

守口市立第壱中学校 3年1組教室

ガヤガヤ・・・

生徒A「この壱中の生徒の誰かが、B級組織を倒したらしいぜ!!」

生徒B「倒したフアクションの内2人は「列強」になったってよ!!」

生徒C「そうか、お前ら2人能力者か・・・でも「列強」って能力者の中でもかなりレベルの高い奴のことを言うんじゃないかな?」

生徒A「そうだぜ!」「列強」っていうのはあの帝王にあたえられた称号なんだぜ!!」

生徒C「ああ、あいつか・・・」

2人の「列強」が生まれたことは、壱中でも話題になっていた。

正也「おい、三島ってたしか、能力者だったよな?」

春樹「うん。」

正也「お前のフアクションに「列強」いるんじゃないやねえの?」

???「野木、三島、なにを話してるんだ?」

2人のもとに来たのは、栄己興さかきおき、2組の生徒だ。

正也「おう栄己、「列強」の話、みんなその話で持ちきりだぜ?」

興「けっ、能力者でもないお前がそんな話したってなにが面白いんだ?」

正也「うるせえな。オレはこれでもエナジースーツを何回もみたことがあるんだよ。ていうかお前は能力者なのか?」

興「ああ、能力者だ。でもB級組織は怖いな。」

正也「意外とビビリか?」

興「自分の命を守るためだ。悪いか?」

正也「ま、大体の能力者はそんなもんだろ?で、「列強」って

そんなにすごいのか？」

興「毎回テストでワースト10にいるお前にはわからねえだろうな。」

正也「シバくぞ栄己!!！」

興「ハハハハハッ！」

興と正也は小学校からの仲で、こうしていがみ合っているが、非常に仲はいい。

春樹「……そういえば、みんながいつてる帝王ってだれ？」

正也「ああ……帝塚 王史^{おし}……通称「帝王」だ。」

興「日本政府の大物の息子で、成績は俺らの比じゃねえ。「列強」にも一番乗りでなったし、B級組織をいくつも潰してる。」

春樹「とても強いんだね。」

興「俺もいつかは帝塚を倒し、能力者のトップになろうと日々がんばってるってわけよ。」

正也「B級組織を怖がってるのにな？」

興「なっ!!それはまた別だ!!！」

その日の夕方 C級組織「血聖団」のアジト

構成員A「ボス!これが新しい兵器でございます。」

ボス「そうか……これでエナジースーツのガキどもに対抗できるわけか。」

構成員B「どうやら我が組織は、C級組織という扱いを受けているようですが。」

ボス「C級組織と油断してやってくるバカな能力者たちに目にも魅ししてくれるわ!!！」

???「それは俺みたいなの奴のことか??？」

ボス「ん!?誰だ!？」

漆黒のエナジースーツに身を包む男がアジトの入り口にいた。

???「俺はボナパルトだ。さあ、目にも魅してくれ。」

エナジースーツの名前は自由に決めることができる。どうやら彼は

ナポレオン・ボナパルトにちなんでつけたようだ。

ボス「ふっ、哀れな奴だ。やれ!!」

構成員たち「○○○○おおーっ!!!」

20人近い構成員たちがサバイバルナイフでボナパルトに襲い掛かった。

スラッ・・・

ボナパルトはステッキの形をした鞘から剣・・・バロンソーを抜いた。

ズバツ！ズバツ！ズバツ！

構成員たち「○○○○ぐあああつ!!!」

構成員たちは倒れた。

ボス「貴様・・・剣だけで倒したのか・・・」

ボナパルト「この剣は特別な素材でできている。普通有能力者が持つ剣より硬い。まあ、このエナジースーツの取り柄はこれしかないがな。ハハハハッ!!」

ボス「ふぎげやがって・・・」

構成員C「こうなったらあれを撃ちましょう!!」

ボス「おうよ!!覚悟しろ!!」

バサッ

ボスは、布に包まっていたある兵器をボナパルトに向けた。それは巨大な大砲のような形をしていた。

ボス「この巨大ビーム砲「バリエント」は対エナジースーツ用に作られたものだ!C級組織と侮つたな!」

ボナパルト「じゃあ、撃つてみるか?」

ボス「言つたな・・・てええい!!」

グウウウン バアアアアッ

「バリエント」からビームが放たれた。しかし、数分後・・・

ドサッ・・・

ボス「ぐはっ・・・」

構成員たち「「「「げはっ！！！！」「」「」

ボナパルト以外は全員倒れた。

ボナパルト「ふふふ・・・やはりこの能力は強いな・・・」
ザッ

???「先客がきてたか・・・」

ボナパルト「ん？誰だ？」

???「私はパトリカス、能力者ですよ。」

ボナパルト「そうか。残念だったな。」

パトリカス「ここで会ったも何かの縁、お手合わせ願いますようか？」

終

エナジースーツ紹介

ボナパルト

武器 バロンソー

energy15:タツグ

ボナパルト「お手合わせか・・・お前、「列強」をねらってるか？」
パトリカス「どうしてそんなことを聞くのです？」

ボナパルト「ま、いいや。その話は後にしよう。」

ダツ ギイイイン！！

2人の戦いが始まった。

ボナパルト「お前のその武器・・・笏しやくか??」

パトリカス「・・・」

ギイイン！ ガイン！ ギイイン！

パトリカス「強いですね。」

ボナパルト「これしか取り柄がないんでな！！喰らえ！！騎士ナイト！！」

ズバアアン！

パトリカス「ぐっ！！」

ボナパルト「準男爵バロネット！！男爵バロン！！子爵ヴィコント！！伯爵アール！！侯爵マーキス！！公爵デューク！！

！大公グランドデューク！！！！

ザンツ！！ ズバツ！！ ズバツ！！ ズバアアアン！！！！

パトリカス「・・・！！！！！！」

ズザアアアアツ

ボナパルト「紳士ジェントリソードの剣・・・位と共に威力も上がる・・・」

ムクツ

パトリカスは起き上がった。

ボナパルト「お前、まだ本気出してないだろ？」

パトリカス「ふっ、わかりましたか？」

タタタタツ

パトリカスはボナパルトに向かっていった。

ボナパルト「何をするかは知らねえが、真っ向勝負なら負けん！！」

ブンツ！！

パトリカス「一の舞・・・」

バツ！ フツ・・・

ボナパルトはバロンソーでパトリカスに斬りかかったが、パトリカスはかわした。そして、ボナパルトの横で笏の形を変え、そのまま通り過ぎた。

ボナパルト「その笏・・・扇子だったのか？」

パトリカス「そうです。」

ボナパルト「その扇子が本気ってわけじゃあ・・・

ズバアン！！！！

ボナパルト「グハアツ！！」

ガクンツ

ボナパルトは両膝をついた。

パトリカス「この扇子・・・風天は相手に触れずして斬ることができ。」

ボナパルト「な、なに！！」

タツ ギン！ ギンツ！

ボナパルト「くっ！！」

2人の武器が交わっている。しかし・・・
スツ・・・

パトリカスは後ろに一步退き、そして・・・

パトリカス「二の舞・・・」

ブンツ・・・ズバアン！！！！

ボナパルト「又アアアツ！！」

パトリカスは縦に風天を振った。そしてボナパルトは見えない斬撃を喰らった。

パトリカス「そろそろ決めますよ・・・大風刃・ヴァーユ！！！！」
ブアツ！！ ズオツ・・・

風天を横に振ると、大きな風の刃がボナパルトに襲い掛かった。

ボナパルト「ちっ・・・コスモブラックホール小暗黒世界！！！！」

サツ ヴァン・・・

ボナパルトが手をかざすと、手が闇におおわれた。そして・・・

ブンツ・・・

風の刃が闇に呑まれた。

パトリカス「！！！！・・・何もかもを吸い込むブラックホールか・・・」

ボナパルト「くくくつ・・・開放だ・・・」

ヴァン・・・グオオオオ・・・ブアツ！！

ボナパルトは手を元に戻すと、パトリカスの後ろにダーツの的ぐらいの大きさのブラックホールが生まれ、風の刃を吐き出した。

パトリカス「・・・ハツ！！」

ズバアツ！！

パトリカスは間一髪かわしたが、肩にあたってしまった。

ボナパルト「ハアツ・・・ハアツ・・・」

パトリカス「かなりのエナジーを使うようですね？」

ボナパルト「さっきの戦いでも使ったんで・・・」

パトリカス「さっきって・・・あのテロ組織か？道理でキレが悪いと思えば・・・そういうことですか？」

ボナパルト「はっ、さっきのお前の技だって吸収できたんだ。俺のブラックホールは直接ダメージを与える攻撃以外なら全て吸収できる。」

パトリカス「そうですか・・・決着、つきますか？」

ボナパルト「ちよつと待った。それは後にしろ。お前の实力はよくわかった。で、お前、「列強」を狙ってるのか？」

パトリカス「うん。狙ってないと言ったら嘘になりますね。」

ボナパルト「だったら、話は早い。俺と手を組もうじゃないか。」

パトリカス「ファクションを作るのですか？」

ボナパルト「ちがう。一時的に同盟を組むだけだ・・・俺の推理があっているなら、お前とはどうも仲良くなれない。」

パトリカス「そう思います？栄己。」

バアーン！

ボナパルトが変身を解くと、そこには興がいた。

興「思うな。九条。」

バーン!

パトリカスが変身を解くと、そこには美形の男子……九条 流堂りゅうどうがいた。

流堂「栄己とは奇妙な因縁ですね。思えば……」

興「そんな昔話はどうだっついていい。で、どうだ?一緒にB級組織を潰して共に「列強」にならねえか?」

流堂「……わかりました。」

二日後 3年1組教室

タッタッタツ

興「おい、野木、話がある。耳貸せ」

正也「何だよ、栄己。」

ゴニョゴニョゴニョ

正也「うそだろ!」

興「どうだ?ウツ……ちょっとトイレに……」

タッタッタツ

興は去っていった。

春樹「どうしたの?」

正也「栄己が「列強」になったってよ。公にされるのは今日の夕方だっつて。」

春樹「ええ!」(栄己が藤崎や伊能と同格なんて……)

一方、興はトイレに向かっていた。すると……

流堂「栄己、「列強」おめでとう。」

興「へっ、お互い様だな。」

流堂も「列強」になっていた。

興「因縁あるもの同士、意外と息ピッタシだったな。」

流堂「でも、ファクシオンはつくらないんですよね?」

興「そりゃな、それぞれのファクシオンつくってから、また戦おうや。ウツ……漏れるー!」

タッタッタッ

興はトイレに向かっていった。

終

エナジースーツ紹介

パトリカス

武器 風天

能力 相手に触れずして斬ることができる。

翌日、学校は、また「列強」の話で持ちきりになった。

3年4組教室

生徒A「「列強」が2人増えたぞ！」

生徒B「誰でもなれんじゃねえの？」

生徒A「誰でもできるわけねえだろ！？前に5人ぐらいでB級組織に挑もうとしたけど、あいつらの兵器、普通の組織とは全然ちがうんだぜ！！俺たち戦う前に逃げちまったよ……」

生徒B「5人で無理なやつを「列強」は2人で……あつ、帝塚だ。」

「
タツ タツ タツ

王史「……」

ガタツ

王者のオーラを放ちながら、ゆっくりと席に座った男は……「帝王」帝塚王史である。

生徒A「お、おい、帝塚。」

王史「何だ。」

生徒B「「列強」がアンタを含め、5人になったな。」

生徒A「ぶつちゃけ、シヨックか??」

王史「私としては、やっと「列強」が増えてうれしい。「列強」はもう少し増えてもらわないと困るからな。」

王史の口調は穏やかだが、その目には静かな闘志が宿っていた。

3年2組教室

興「遂に「列強」は5人になったか。」

流堂「まるで他人事のようにですね。」

興「ハハツ。そうだな。ところで、変わったことはあるか？」

流堂「別に。」

新しい「列強」が生まれたことは公にされるが、誰になったかまでは公にされない。

「???」おやおや、お二方お揃いで。」

目をキラキラさせたある男が2人のもとにやってきた。

興「ん？おう、座原か。」

座原鋼健（いっけん）という。

流堂「あなたも「列強」の座を狙っているのですか？」

鋼健「当たり前だ。「列強」になったら、世界を動かすこともできるのだからな。」

興「ほう。座原は世界を動かしたいのか？」

鋼健「当然。・・・ていうか、お前ら「列強」だろ？」

流堂「なぜそう思いますか？」

鋼健「この学校で「列強」になれるような奴はお前らぐらいだからな。で、「列強」なのか？」

興「ん、正解。」

流堂「2人で、B級組織のアジトに乗り込み、あつというまに壊滅させましたよ。」

鋼健「あつ、そう。だが・・・これから、革命が起きるぞ。」

興「革命？どういうことだ？」

鋼健「それは言えねえ。だが、エナジースーツ同士で本気の戦争がはじまるかもしれない。それだけは言える。」

流堂「何でそういうこと知ってるんです？」

鋼健「俺は革命を起こす側だからさ。」

興「ほう。そうか。じゃあ俺はお前の敵になるのか。」

鋼健「ああ。ちょっと残念だな。では、革命の日まで楽しみにしてるがいい。」

興「何で、このことを俺らに教えただ？」

鋼健「・・・別に。」

タッタッタッ

鋼健は去っていった。

流堂「変な奴ですね。」
興「俺らも充分変だがな。」

一週間後

第巻中学校特別室

ガラガラガラ

隼人「お前が俺を呼ぶなんて珍しいな。帝塚・・・」

王史「突然呼び出して悪い。実は、日本政府から特命が入った。」

「列強」伊能隼人は、王史に呼び出され、特別室に来ていた。

王史「今、かつてない事態が起こっている。お前も知っているな。」

隼人「ああ、これだろ？」

ピツ ヴァン・・・

隼人が出したチエインジビジョンには現在存在するファクションのリストが載ってあった。

王史「最近、「ボリシエヴィキ」というファクションが勢力をつけてきている。」

隼人「勢力？テロ組織じゃあるまいし。第一、ファクションに勢力とかあんのか？みんなが噂してるのは、最近「メンシエヴィキ」っていう名前のファクションが多いってことだけだぜ？」

王史「「ボリシエヴィキ」は他のファクションを攻撃し降伏させ、「メンシエヴィキ」という下部組織にさせる。そして、各ファクションにアジトを築き、そのアジト一帯には他の能力者を入れさせないようにする。」

隼人「もし入ってきたら？」

王史「「ボリシエヴィキ」・「メンシエヴィキ」からのリンチが待っている。現在「メンシエヴィキ」は8つあり、一つにつき3人が所属している。つまり、全「メンシエヴィキ」で24人。更に「ボリシエヴィキ」のメンバー3人を加えるところの勢力の所属人数は27人となる。」

隼人「今、その勢力圏内に入ったら27人の能力者にリンチにあう

のか・・・」

王史「そう深刻に考えることはない。「メンシエヴィキ」は「ボリシエヴィキ」が強制的に結成させたファクシオンだ。だからチームワークは全くない。それに「ボリシエヴィキ」の3人にしても、「メンシエヴィキ」の24人にしても、テロ組織との実戦経験が乏しい。我々2人でも充分勝てるかと判断した。」

隼人「2人って、2人だけで乗り込むのか!？」

王史「そうだ。乗り込むには明日5時。このことは日本政府の特命で断ることはできない。わかったな。」

隼人「わ、わかったよ。」

エナジースーツ激動の時代はこれよりはじまる。

終

energy17:ボム

「メンシエヴィキ」No.1アジト

メンバーA「これからこの組織どうなるんだろーなー。」

メンバーB「「列強」が来たりして。」

メンバーC「「列強」が来たら、いくら「ポリシエヴィキ」でもあぶねーよなー。」

メンバーA「そんな時は俺たちの自由の時だな。「列強」が来たら通してやるうぜ。」

メンバーC「でも「ポリシエヴィキ」が勝ったら・・・」

メンバーB「俺たちは殺されるな。」

メンバーA「リンチか・・・」

メンシエヴィキはNo.1～No.8まであり、それぞれのアジトに3人づつ見張りがいる。

メンバーB「あ、誰か来た。」

タツ タツ タツ

アジトに来たのは隼人と王史である。

メンバーA「伊能と・・・帝塚？何しにきたんだ？」

ゴオオオツ・・・

王史は「帝王」のオーラを放ちながらこう言った

王史「「ポリシエヴィキ」を潰しにきた。通してくれないか？」

A・B・C「・・・どどどどどぞぞぞ！！！！！」

隼人（意外とあっさりしてんな・・・）

メンバーB「でも・・・2人だけじゃ・・・」

王史「大丈夫だ。伊能も「列強」だ。」

メンバーC「そ、そうなのか。」

王史「道を開けてくれてありがとう。じゃあな。」

タツ タツ タツ

2人は「ポリシエヴィキ」のアジトを目指し、去っていった。

王史「思った通りだ。」

隼人「「列強」の名を出ただけであいつらビビッてたな。」

王史「これまでの歴史の中で、侵略で勝ち取った国によかった例はない。」

隼人「あんまりオレそういうのに詳しくないんだよな。」

王史「・・・」

こうして2人は「ポリシェヴィキ」のアジトにむかった。

「ポリシェヴィキ」アジト

ザザツ

隼人「あ、お前ら・・・」

王史「私が思った通りだ。浦地 零れいと登呂津 獅朗しろう・・・」
アジトにいたのは浦地と登呂津という男だった。

浦地「ついに「列強」が動き出したようだな・・・」

登呂津「だが、「列強」にこの闘争を止めることはできない！」

隼人「おい、帝塚・・・思った通りって・・・」

王史「あの2人は革命思想を持っている。思想を持つことは自由だが、行動を起こされたらたまらん。」

浦地「行動を起こすことを前提として革命家は思想を持っている。

そしてついに・・・この日は来た・・・能力者の頂点に立つお前を倒すことで私が頂点に立ち・・・全ての能力者、そして、これからも現われるであろう能力者を、この「ポリシェヴィキ」の名の下に統率する日が。」

隼人「じゃ、何で「列強」にはならないんだ？」

浦地「私は「列強」として頂点に立つつもりはない・・・私は支配者になるのだ。」

隼人「支配者？どういうことだ？」

浦地「全ての能力者が私の前にひれ伏し、私の采配ひとつでこの守口を変えるほどの力を手にするのだ・・・」

登呂津「俺は浦地さんの協力者として「ポリシェヴィキ」の最初の

メンバーになった。」

王史「もう一人のメンバーは？」

浦地「あいつは気まぐれななんだ。どこかをふらついているだろう。そんなことより、お前たち、我々に倒されに来たのだろう？」

ピツ　　energy

ピツ　　energy

浦地「さつさと変身しろ。バズグ・・・」

登呂津「セドルフ・・・」

カアアアツ　ジャキーン

カアアアツ　ジャキーン

「ポリシエヴィキ」の2人は変身した。

隼人「「列強」としては初か・・・ライトロン！」

王史「バドガイザ・・・」

カアアアツ　ジャキーン

カアアアツ　ジャキーン

隼人と王史も変身した。

ライトロン「そらっ!!」

サツ　バリエイツ!

ライトロンは早速2人に電撃を発射した。しかし・・・

ババツ

2人は電撃をかわした。そして・・・

バズグ「行け、セドルフ。」

セドルフ「はいっ!バズグさん！」

ダダッ

セドルフ「伊能・・・いや、ライトロン、覚悟しろ!!」

ブンッ!!　ギイーン!!

ライトロン「うおっ!!」

セドルフは腰にあったメイスをライトロンに向けて振るった。ライトロンは咄嗟にエレクトロソードで攻撃を防いだ。

セドルフ「革命の邪魔はさせない!!」

ライトロン「革命なんて時代おくれだぞ!!」

ギギイーン! ガガアアン!

2人の壮絶な攻防が始まった。

バズグ「場所を変えるか?」

バドガイザ「そうしよう。」

タツ タツ タツ

2人は場所を離れて戦うことにした。

ライトロン「ハア・・・ハア・・・」

セドルフ「フウ・・・フウ・・・」

数分たち、2人の肉体は疲労していた。

セドルフ「タアアアツ!!」

ダッ

ライトロン「まだ来るかよ!!」

ギギイーン!

セドルフの一撃をライトロンは防いだ。しかし・・・

セドルフ「ビロードマイン!」

ポオオオン・・・

メイスの周りが爆発しライトロンは直撃を喰らった。ライトロンは爆発によって吹き飛ばされた。

ライトロン「お前、何をしたんだ・・・?」

ライトロンは立ち上がった。

セドルフ「この爆烈棍は触れたものに対して爆発を起こす特性をもっている。」

ライトロン「さっきまで爆発しなかったのはなぜだ?」

セドルフ「爆発させるかさせないかは俺の自由なのさ。さあ、行くぞ!!」

ブンッ! ブウンッ!

ライトロン「ちっ!くそっ!」

ライトロンは間合いをとろうとするが、セドルフがそれを許さない。

セドルフ「喰らえ!!」

ブンッ! ギイン!

ライトロン「しまっ……」

セドルフ「喰らえ!ビロードマイン!!」

ボウウン!! ドサッ……

ライトロンは倒れた。

セドルフ「お前ほんとに「列強」か?」

ダダッ ブンッ!

セドルフ「くたばれ!!」

セドルフは倒れてるライトロンニ爆烈棍を振り下ろした。

ライトロン「別に「列強」って意識しちやあ……」

ダッ ババッ!

ライトロンは起き上がり、セドルフの一撃をかわし、セドルフの胸に両手をあてた。そして……

ライトロン「いねえよ!!サンダースタンハンド!!」

バチイッ!!

ライトロンの両手からセドルフにむけて直接電撃が走った。

セドルフ「がああっ!!」

ドサッ……

セドルフはシヨックで気絶した。

ライトロン「やっぱお前ら……経験不足だな。さて、帝塚のところに行くか……」

タッ タッ タッ

ライトロンはその場を去った。

終

エナジースーツ紹介

セドルフ

装着者 登呂津獅朗

武器 爆烈棍（触れると爆発する）

energy18：ロイヤル

B級組織「ジパング革命軍」アジト

リーダー「くたばれ!!」

ビィイッ!!

テロリスト達のレーザーガンがボナパルトに向けて放たれる。しかし……

バツ

ボナパルト「コスモブラックホール小暗黒空間!!」

ヴァン…… ビシユウン……

ボナパルトの右手にレーザーはあっさり吸収される。

リーダー「なに!なんだあいつは!?!」

ボナパルト「B級組織はこれで二つ目か……あつけない。開放だ……」

ヴァン…… ビィイッ! ビシユウン!

リーダーらの前に小さな宇宙空間が現われ、ビームがリーダー達に向けて飛んでくる。

リーダー達「うわあああつ!!」「」「」

直撃は確定的だと思ったその時、

ヴァン…… バチィィィッ!

リーダー「はっ……?」

ボナパルト「ん?」

リーダーの前に突如バリアが張られ、ビームは弾かれた。

「???」よう!多分栄己か九条だろ?。」

ボナパルト「何でわかった?」

「???」こういう戦闘スタイルを他の「列強」がするとは思わねえな……」

ボナパルト「……座原だな。お前。エナジースーツの名は?」

「???」名前はジュガシヴだ。」

ボナパルト「で、何しに来た？そついえばお前革命がどうたらこうたら言つてたな・・・俺を倒しに来たのか？」

ジュガシヴ「何だ、聞いてねえのか。「ボリシエヴィキ」を。」

ボナパルト「「ボリシエヴィキ」？それを言うなら「メンシエヴィキ」じゃねえのか？」

ジュガシヴ「「メンシエヴィキ」が「ボリシエヴィキ」に従つてるフアクション。いわばシンパ集団だな。」

ボナパルト「じゃあ、座原はその「ボリシエヴィキ」の一人だつてのか？」

ジュガシヴ「そついうことだな、だが今、帝塚と伊能がアジトを襲撃しているらしい。」

ボナパルト「そうか・・・何で座原は助けにいかねえんだ？」

ジュガシヴ「俺が「ボリシエヴィキ」のメンバーになった時、俺はそのリーダーより弱かった。だが今は強い。」

ボナパルト「それは自惚れか？」

ジュガシヴ「自惚れじゃないさ。証拠、みせてやろうか？そこにいるテロリストどもで。」

リーダー「えつ・・・!？」

腰を抜かしていた「ジパング革命軍」のメンバー達は驚いた。

ボナパルト「じゃあ、俺は見てればいいんだな。勝手にしろ・・・」
タツタツタツ ドカッ

ボナパルトは少し離れたところでジュガシヴの戦いを見ることにした。

ジュガシヴ「さつ、始めそうぜ・・・」

「ボリシエヴィキ」アジト前

バズグ「帝塚、お前の武器はその腰にあるサーベルか？」

バドガイザ「そうだ。」

バズグ「よくそれで「列強」になれたな。だが、お前は今日で終わりだ。なぜなら、このスパイラでお前を倒してしまうからだ・・・」

「ババツ ギユイイイン！・・・」
バズグの武器は騎兵槍の形をした2本のドリル・・・スピヤーラである。

スラアツ・・・

対するバドガイザの武器は、ただのサーベルである。

バズグ「お前は負けるのだ。自分の武器の機能性を恨むがいい。」

バドガイザ「・・・「メンシエヴィキ」のアジトにいった時、。」

ダツ ギツ！ ガイン！ ガイン！

先に仕掛けたのはバズグだった。バドガイザのサーベルはドリルに触れるたびに弾かれ、思うように動くことができない。

バズグ「ふっ、いかにお前がテクニクにおいて勝っていても私の破壊力には勝てない。さあ、引導を渡すときだな。」

バドガイザ「・・・。」

ババツ

バズグはバドガイザから離れた。

バズグ「これで決めてやる・・・。」

ガチャ

バズグはスピヤーラを足に装着した。そして・・・

ダンッ！！ ギュルルルッ！！

バズグ「革命の刻は来た！フラッディサンデー血の日曜日！！」

高く飛び上がり、両足に装着したスピヤーラをバドガイザに向けた。すると、まるでライダーキックのように、斜めに急降下を始めた。

バズグ「フハハハハハッ！！」

しかし・・・

バドガイザ「ソード・オブガイザ帝王の剣」

ピタアツ・・・

バズグ「ハハハッ・・・何い！？」

バドガイザのサーベルにバズグが触れた瞬間、バズグの動きが止まった。さらに・・・

ズバァン！！

バズグ「ぐわああっ！いつの間に・・・」

バズグの体に斬撃が走った。

ドサァツ・・・

バズグ「貴様・・・何をしたんだ！？」

バドガイザ「貴様に教えることはない。」

バズグ「何だと・・・？」

ギユイイン！ ダダツ

バズグ「ふざけるなーーー！！！」

バズグはスピヤーラを腕に持ち替え、バドガイザに突進した。

バズグ「ぐあああーーーっ！！！」

ブンッ！ ブンッ！

二つの凶器が容赦なくバドガイザに襲い掛かる。しかし・・・スルッ・・・

バドガイザはけして退くことなくスピヤーラをかわし、そして・・・ビュッ！！！！ トン・・・

バドガイザ「！！！」

サーベルはバズグの胸に、突き出す形でサーベルをあてた。

バドガイザ「ロード・オブ・カイザー帝王の道」

ドシュッ！！ ドガァァン！！ ドサツ・・・

サーベルはバズグの体を貫き、そして、まっすぐ吹き飛んだ。

バズグ「グ・・・グフッ・・・まさか・・・この私が・・・」

バドガイザ「安心しろ。エナジースーツを貫いたとしても、怪我は全くないはずだ。少なくとも、能力者同士での戦いではな。」

タツタツタツ

ライトロン「おう。そっちも決着ついたか。」

バズグ「・・・登呂津も負けたのか！・・・どうやら私は「列強」をなめていたようだ・・・」

バドガイザ「今回は注意だけですんだが、またこういうことをした場合、フアクシヨンの解散、最悪の場合は能力を失うことになる。」

日本政府の決めたことだ。」

バズグ「日本政府か・・・」

バドガイザ「お前らのことを我々が公言することはない。安心するんだな。じゃあ、行くぞ、伊能。」

ライトロン「あ、ああ・・・」

タツ タツ タツ

2人はアジトを去った。

バアアアツ!

2人は変身を解いた。

隼人「こんなことつて、日本政府がいちいち介入することか?」

王史「・・・日本政府にとってこういうことは想定内だった。しかし、あえて私たち「列強」に革命を防ぐことを命じたのだ。現時点での実力を調べたかったのだろう。」

隼人「じゃあ、浦地は?」

王史「今後、浦地がこういう運動を起こしても、さっき私が言ったような処罰は、形の上では制定されていても、行使されることはないだろう。」

隼人「いいかげんなんだな、政府も。」

王史「そうでもない。すべては想定内だ。そう・・・」

王史が何かを言おうとした時・・・

浦地「私は何度でも革命を起こす!!何度敗れようとな!!!!」

アジトから浦地の叫びが聞こえた。

隼人「!!あいつ、あきらめてないのか。」

王史「そう・・・浦地がまた行動を起こすこともな。」

終

エナジースーツ紹介

バズグ

装着者 浦地零

武器 スピヤール(騎兵槍の形をしたドリル)

energy19：ストロング

翌日

興「……」

興は教室で一人、考え事をしていた。

昨日

ボナパルト「おい！バカにしてんのか！？ここで戦ったっていいんだぜ！」

ジュガシヴ「わりいわりい！そう怒んなって。お前とは、やるべきことをやってから戦おう。」

ボナパルト「何だよ？やるべき事って？」

ジュガシヴ「なあに。あの革命バカに比べたらちっぽけなことさ。」

ボナパルト「ちっぽけなこと？」

ジュガシヴ「ああ、俺は……」

「タッタタッ」

王史「栄己、放課後に特別室に来てくれ。」

興「ん？て、帝塚……」

「放課後 特別室
ガチャ」

興「けっ、そういうことか……」

王史「全員そろったな。」

義景「お前が4人目の「列強」か。」

隼人「意外だな。」

流堂「エナジースーツは何が起こるかわかりませんから。」

興「意外？それはこっちのセリフだったの。」

特別室には「列強」が揃っていた。

王史「今回「列強」を呼んだのは、お前たちも知っていると思うが「ポリシエヴィキ」というファクションについてのことだ。」

義景「革命を目論んだ組織だそうだな。伊能。」

隼人「ああ。昨日、オレと帝塚でアジトへ乗り込んだ。」

流堂「で、結果はどうなったのですか？」

隼人「オレたちの圧勝。「メンシエヴィキ」の奴らは腰抜けで、「

ポリシエヴィキ」も弱かった。なあ？」

王史「だが、あと一人いる。」

隼人「確か、そうだったな。」

興・流堂「座原か。」

王史「座原だと？」

興「ああ、自分で言ってたな。」

流堂「革命を起こす側と。」

興「まあ、今は全然その気はないらしいがな。昨日会った。」

義景「あいつは「ポリシエヴィキ」じゃないのか？」

王史「乗り気はなかったらしい。」

義景「そういえば、「ポリシエヴィキ」には誰がいるんだ？」

王史「浦地と登呂津だ。2人は革命思想を持っていたんだ。」

興「座原とあの2人が同じファクションだと？ありえないな。」

流堂「確かにそうですね。」

興「だが、伊能。お前らが戦った2人は弱かったんだろ？」

隼人「オレが戦ったのは登呂津だ。やっかいな能力使っていたけど、

経験不足だったからすぐに倒せたな。」

王史「私は浦地と戦ったが、伊能でも充分倒せた。」

義景「「列強」の足元にも及ばなかったわけだ。」

王史「だが、ファクションの解散はまだしていない。またいつ動き

出すかわからない。」

隼人「ああ、あいつ、革命を起こす気、全然失っちゃいねえからな。」

王史「そこでだ、君たちには「ポリシエヴィキ」と「メンシエヴィ

キ」への対応を最優先してほしい。」

義景「そういうことか。エナジースーツ同士の戦いは避けられないようだな……」

興「いや……俺達が戦う必要はない。」

流堂「そうですか？それはあまりにも楽天的では……」

興「どちらにしろ、あの勢力は今日で終わりだ。」

「ポリシエヴィキ」アジト

「メンシエヴィキ」No.1のメンバーは呼ばれていた

ドサアツ……

メンバーA「ぐはあっ!!」

バズグ「貴様、なぜ通した？「列強」は我々の敵だぞ!!」

メンバーB「「帝王」にかなうわけないでしょ！無茶じゃないですか！」

セドルフ「うるさい!!」

ドン!! ボガアアツ

セドルフの爆烈棍がメンバーBに直撃した。

メンバーB「そ、そんな……」

ピッ ピッ

バズグ「今、「メンシエヴィキ」のメンバー全員に連絡を入れた。

お前らはリンチだ。」

メンバーC「へっ、「列強」に負けたような奴に皆ついてくんのか？」

ギユイイイン!! ズガアアツ!

メンバーC「げふっ!!」

バズグ「えらそうな口きくじゃねえか？残念ながら、No.5～No.8までは自分から恭順を示した。裏切るようなことはしねえよ。

だが、心配するな。」

ギユイイイン!!

バズグ「お前は先につぶしてやるよ!!」

メンバーC「うわあああつ!!」

ヴァン・・・バチイイ!!

バズグのドリルはバリアに弾かれた。

バズグ「ん？」

セドルフ「このバリアは・・・」

????「クツクツク。「列強」に負けておいてなお尊大な態度をとるか。あきれたな。」

バズグ「ジュガシヴ!! 貴様、あの時何してた!？」

ジュガシヴ「今、4時59分だ。あと数秒でわかるさ。」

4時59分 特別室

興「もうすぐだな。」

王史「何がだ？」

興「5時になればチエインジビジョンが更新される。」

王史「ああ、そうだな。」

昨日

ジュガシヴ「さ、B級組織を潰したが、これで本当に「列強」になれんのか？」

ボナパルト「ああ、直にお達しが来ると思う。」

ジュガシヴ「そうか・・・」

ピピッ

「B級組織「ジパング革命軍」を倒したあなたは「列強」に選ばれました」

チエインジビジョンから突然、通達の音声 flowed.

ボナパルト「これで6人目か。「列強」も。」

ジュガシヴ「意外と簡単だったぜ。「列強」ってこんなもんか。」

ボナパルト「おい! バカにしてんのか!? ここで戦ったっていいんだぜ!」

5時 「ポリシエヴィキ」アジト
ピピッ

バズグ「ん？……お前、どういうことだ！？」

セドルフ「え？……うそだ……お前が……」

チエインジビジョンには「列強」リストにジュガシヴの名があった。
ジュガシヴ「悪いな。革命ごっこにはもう飽きたんだ。」

バズグ「革命ごっこだと！？貴様！！どういっつもりだ！！！？？」

ジュガシヴ「へっ、俺はな……」

5時 特別室

義景「なっ……」

隼人「こいつ、まさか座原か……」

流堂「じゃあ、テロを起こす側の座原が味方だというのはですか？」

王史「「列強」がまた一人……栄己、なぜお前は知っていた？」

興「この目で見たからさ。「列強」になった瞬間を。」

義景「で、座原は一体何がしたいんだ？」

興「さあな、大した目的はねえと思うが、今は……」

「「ポリシエヴィキ」を潰す」

終

energy20:ブレイク

バズグ「潰す？なぜお前が潰すのだ？」

ジュガシヴ「一ヶ月前、俺はお前に負けた。そして「ポリシェヴィキ」に入った。」

バズグ「そうだ。そしてお前は「ポリシェヴィキ」の3番目のメンバーになった。」

ジュガシヴ「だが、もう俺には「ポリシェヴィキ」にいる必要はなくなった。俺は「列強」になったからな。」

セドルフ「自惚れるな！我々は「列強」になれないのではなく、ならないのだ！日本政府の狗になど、なつてたまるか！」

ジュガシヴ「「列強」に負けたお前らが言ったところで、ただの言い訳にしか聞こえないぜ。ハハハハッ！」

セドルフ「ぐうっ・・・。」

バズグ「じゃあお前は「列強」に、いやまず我々に勝つことができないのか？」

サツ「ギューイーン！！」

ジュガシヴ「自分を過大評価しすぎだろう。」

バズグ「黙れえええっ！！！」

ダダッ

バズグ「セドルフ！お前は手を出すな。この裏切り者は俺がやる。」

セドルフ「わかりました。」

バズグ「くらええええっ！！！」

ジュガシヴ「鉄のカーテン・・・。」

スツ「ヴァン・・・バチイッ！」

ジュガシヴが前に手を出すと、四角いバリアがジュガシヴの前に来た。ちなみにバリアは透明である。

バズグ「鉄のカーテンか・・・たいそうな名前だな。前に戦った時はそんな名前なかったはずだ！」

ジユガシヴ「いい名前だろ？」

バズグ「なめるな！！貴様忘れたのか！？このバリアは俺には効かん！！！」

グアアッ！！

バズグは鉄のカーテンに向けてスピャーラの渾身の一撃を繰り出した。しかし……

ジユガシヴ「フフフ……」

スッ ガチャ…… ドウン！！

バズグ「ぐああっ！！！」

ジユガシヴが放ったライフルの銃弾がそれを阻んだ。

バズグ「な……何？」

セドルフ「弾丸がバリアを通り抜けた……」

ジユガシヴ「俺がこの力に早くに気づいていれば、お前など敵ではなかったのだ。」

バズグ「く……くそお！！これならどうだ！」

ガチャ…… ダンッ！

ジユガシヴ「フラッディサンデー血の日曜日！！！」

ギョルルルッ！！

ジユガシヴ「鉄のカーテン……」

バジイイッ！

ジユガシヴ「……」

ガチャ ダアン！ ダアン！

ジユガシヴはライフルを放ったが、フラッディサンデー血の日曜日に弾かれた。

バズグ「こんなもの効くか！」

ビキッ ビキッ

鉄のカーテンにヒビが入った。

バズグ「どうだ！！私の革命など誰にも止められない！！！」

ギョイイイン！！ ピシイイ！！……

スピャーラに拍車がかかる。鉄のカーテンにさらにヒビが入る。

ジユガシヴ「……」

サッ

ジユガシヴは両手をかざした。そして・・・

ジユガシヴ「強制収容グライクレイゲリ・・・」

ヴァン・・・

バズグの周りに透明の立方体を創った。つまり、バズグはバリアに
囲まれたのだ。

バズグ「な、何だ!？」

スピャーラを足から外し、バリアの上に立ったバズグは困惑した。

ジユガシヴ「さあて・・・お前はもう終わりだ。」

バズグ「な・・・何だと!? こんなバリアなど・・・」

ギユイイン! ガキイイン!!! ガキイイン!!!

バズグ「な・・・何?」

ジユガシヴ「この囲いは鉄のカーテンの五倍固い。お前では無理だ。
・・・疲れた。」

バズグ「疲れただと!! なめているのか!?!??」

ジユガシヴ「・・・疲れた。止めを刺そう。クツクツク・・・」

フウウウツ・・・

バズグ「な・・・何だ!! 周りが全く見えん!!」

バリアが突然黒くなった。

ジユガシヴ「肅清テロル・・・」

ガチャガチャ ダアン!!!

ジユガシヴはライフルをバズグに放った。

バズグ「ウワツ!!」

発砲音を聞いて、バズグは身をかがめる。バズグの真上を銃弾は前
方のバリアをすり抜け、通過するが・・・

キン!ズドン!

後方のバリアをすり抜けることはなかった。銃弾は跳ね返り、バズ
グに命中した。

バズグ「グアツ!!!・・・どういうことだ・・・銃弾はすり抜ける
はずじゃなかったのか?」

ジユガシヴ「クツクツク・・・教えてやろう。バリアが銃弾をすり抜けるも、すり抜けないも私の自由なのだ。つまり・・・私が創り上げたこの密閉地帯は貴様の死刑台というわけだ。」

バズグ「自由だと?」

ジユガシヴ「だからお前は・・・いや、説明するのも面倒くさいな。」

「

スツ ガチャ・・・

ジユガシヴは、ライフルに今までと違う弾を装填した。

ジユガシヴ「シベリアン エクスキューション極寒の処刑」

ダアアン!

ライフルからはいつもより大きな音がバリアに向かって鳴った。そして・・・

ズドドドドウン・・・

バズグ「ゲアアアアッ!!!」

ジユガシヴ「フッフッフ・・・」

フウ・・・ ドサッ

バズグの悲鳴と共にバリアは解除され、バズグは落ちていった。

セドルフ「浦地さん!!!」

バズグ「お・・・お前・・・何をした・・・」

ジユガシヴ「・・・このライフル・・・ドラグノフは弾次第でさまざまなバリエーションを持っている・・・」

バズグ「じゃあ・・・さっきのは・・・ショットガン散弾銃・・・」

ジユガシヴ「クツクツク・・・ハハハハハッ!!!」

セドルフ「く・・・くそおっ!」

ピッピッピッ

セドルフ「な、なんだこれは!!!」「メンシエヴィキ」が全部壊滅してる・・・」

セドルフはチェインジビジョンを見てこう言った。

バズグ「そんなバカな!!!・・・あ、ありえんぞ!!!」

ジユガシヴ「思った通りだ。「列強」が動き出したというわけか。」

(クツクツク……栄己だけに言ったつもりが、「列強」全員が動き出すとはな……)

ガチャ

ジュガシヴ「おい、降りろ。この戦いから降りろ。」

ジュガシヴはバズグに銃を向けてこう言った。

バズグ「ど、どういうことだ!？」

ジュガシヴ「その「チェインジビジョン」でできるだろ。」

セドルフ「き、貴様ああっ!!！」

ブンツッ! ガキイーン!!

セドルフ「くそおう!!！」

セドルフは爆烈棍をジュガシヴに振りかぶったがバリアに阻まれた。

ジュガシヴ「クツクツ、早くやれ。」

バズグ「だ、誰が……私ほか、革命を……」

ダアン!!

ジュガシヴ「……やれ。何度も言わせるな。」

バズグ「ハ……ハ……」

ジュガシヴ「まあいいや。今する必要はないな。とりあえず、明日

までによく考えておくんだな。登呂津、お前はどつする?」

セドルフ「な、何?……」

ジュガシヴ「……」

ガチャ

セドルフ「ちっ!!」

ダダッ

セドルフは逃げた。

ジュガシヴ「クツクツク。登呂津はまあいいか。だがお前はだめだな。降りるか、それとも、「帝王」にでも頼むんだな。ハッハッハ・

……」

タッタッタ

バズグ「エ……エナジースーツ……お……恐るべし……」

「メンシエヴィキ」No.5アジト
ピピピッ

バドガイザ「・・・「ポリシエヴィキ」崩壊か・・・」

バズグがリタイアしたことによる「ポリシエヴィキ」崩壊はチエイ
ンジビジョンを伝って「列強」たちに知れ渡った。ちなみに他の「
列強」は別のアジトに向かっていた。

カアアアツ バアアアン！

王史「ふっ。今のうちに「ポリシエヴィキ」を潰しといてよかった。
問題はこれからか・・・」

終

エナジースーツ紹介

ジュガシヴ

装着者 座原鋼健

武器 ドラグノフ（ライフルとショットガンの機能をあわせもつ）
能力 バリアを張る

energy 21 : ウォーゲーム

特別室

ガチャッ

ドアが開いた。

鋼健「へっ、「列強」かい、この6人が。」

興「まあな。」

流堂「にぎやかになってきたじゃないですか。」

義景「曲者3人が登場か。」

隼人「「列強」が6人もいるのか・・・」

王史「ようこそ。座原鋼健。会議に出るのは初めてだったな。」

鋼健「お、おう。で、話があるんだろ？」

王史「そうだ。・・・この学校の名前が変わることは知っているな？」

興「そういえば、そんな話あったな。」

隼人「みんな、あんまり興味なかったよな。」

王史「第壹中学校などという名前ではこれから起こるのであるということに対して見栄えが悪いそうだ。」

義景「その・・・起こるのであるということとは？」

王史「座原が予想していた、エナジースーツ同士の争いだ。」

鋼健「ほう・・・遂に起こるか。」

王史「日本政府が学校同士での戦いを推進しだしたのだ。」

流堂「意味がわかりませんね。何ゆえそんなことを・・・」

王史「学校同士で戦いを起こすことにより、意識を高まらせるのが狙いらしい。」

興「で・・・名前は何になったんだ？」

王史「『光和学園』だそうだ。」

興「学園って・・・ここ中学校だぞ。」

王史「我々が進級しても、同じだ。この地域の学校のほとんどは中

興「ん？」

流堂「はい？」

鋼健「俺たち3人でやらねえか!？」

義景「それは無理だろう。」

隼人「いくら何でも3人は・・・」

鋼健「わかつてるつて。3人だけでつてわけじゃねえよ。『列強

』3人と3人が認めた奴数人』でだ。」

王史「ほう・・・自信があるというのか？」

鋼健「藤崎と伊能はたった4人でB級組織、それも大型のB級組織の『ブラックジーベン』を潰したんだ。俺らにもできるだろ？」

義景「だからといって、わざわざ僕らを抜きにする必要はないだろ。」

鋼健「まあな。だが、ちよつとした腕試しをしてみたいんだよ。お前ら2人はどうだ？」

興「あのな、俺たち3人はそんなに仲よくねえだろ？」

流堂「ま、そうですね。」

確かに3人は幼馴染というわけでもなければ、親友でもなかった。

流堂「しかし、私たち3人はそんなに仲がよくないからこそ、どこか認め合っているところがあるんじゃないですか？」

興「まあ、そうか・・・」

確かにそうである。興が実際に鋼健の実力を目の当たりにして、『列強』に値する能力を持っていると思った。

流堂「どうです？座原の誘いに乗ってみたらどうですか？」

興「・・・ああ、わかった。」

鋼健「お前ら2人ならそういうと思ったぜ。」

興「おい、ありがとうの一言ぐらい言えよ。」

鋼健「わかったわかった。ありがとよ。」

王史「・・・ま、いいだろう。『真華学園』との対決はおそらく一カ月後になるだろう。それまでにメンバーを作っておくんだな。」

『真華学園』

守口市最大の生徒数を誇るこの学校には500人を超える能力者がいる。しかし、他の学校同様、大抵のエンジニアーツが量産化されており、『光和学園』に比べると、いささか、おもしろさに欠ける・

????「ふつ、日本政府がこんな紙を送ってきたか。」

????「紙とは何なのですか？主席。」

主席「『光和学園』との「模範戦闘」の企画書だ。」

????「『光和学園』といいますと。」

主席「そうだ。エンジニアーツの量産化がされていない守口市唯一の学校だ・・・意外に距離も近いし、何度か見かけたこともある。知り合いはいないかな。」

????「私もです。で、『^{シャッコウ}赤光』からは誰を・・・」

主席「全員だ。」

????「ぜ、全員ですと!？」

『^{シャッコウ}赤光』とは『真華学園』唯一にして最強のファクションである。

そして主席とはリーダーの肩書きである。

主席「そうだ。お前にも出てもらうぞ。」

????「は、ははつ。」

主席「一カ月後か・・・それまではゆるりとしておけ。」

????「・・・ははつ。」

『真華学園』との戦いは一カ月後に始まる

終

energy21：ウォーゲーム（後書き）

どうも、ラスプーチンです。この第二部はエナジースーツ同士の戦いが中心になり、これからはいよいよ、他校も登場してきます。読者のみなさんは、犯罪組織と戦う第一部と第二部ではどちらが好きですか？。

さて次からは『真華学園』との戦いです。独特な「列強」3人が生み出す、激しく、すさまじく、そしてえげつなく熱くない物語を期待しててください

energy22：ヘルプ

数日後、朝、3年2組

ガラガラガラッ

興「うーす。」

興が登校した。

鋼健「おう。どうだ？メンバー選びの調子は。」

興「思ったより見つからねえな。そっちは？」

鋼健「こつちもいねえよ。てか俺としては最悪3人だけでもいいと思ってるんだがな。」

興「まあな。」

ガラガラガラッ

興「ん？・・・おう。おはよーさん。」

「???」「あ、栄己くんおはよう。昨日はメールブチってごめんね。」

興「いや、いいよいよ。それくらい。」

「???」「眠たくなったから・・・」

興「遅い時間にメールした俺が悪いだけだったの。あ、そうそう・・・」

教室にきた女の子・・・尾津弓香おつゆみかは興と少し話をして自分の席へ向かった。

鋼健「意外だな。栄己にいつのまにか女友達がいたとは。」

興「まあな。別に不思議じゃねえだろ。」

鋼健「俺もいるしな。てかお前尾津のこと好きなのか？」

興「何でそんなこと聞くんだよ？」

鋼健「態度があきらかに違うだろ。で、どうなんだ？」

興「・・・気になるだけだよ。てか尾津には彼氏いるんだろ？」

鋼健「そうだったな。悪い悪い。変な質問したな。」

興「ったく・・・」(あ、そついえば最近、別れたって言ってたな。ま、気になるだけだしどうでもいいか。)

夕方 河川敷

弓香「すごい……これがエナジースーツの力なんだ……」
能力者でもあった弓香は、エナジースーツの力がどんなものなのか、
C級組織で試してみた。すると予想以上の力を発揮したので、変身
を解いた後、驚いていた。

弓香「帰るか。」

弓香は家に帰ろうとした。しかし……
ザッ

???「ゆ……弓香……」

エナジースーツに変身した男が弓香の前に現われた。

弓香「えっ……誰？」

???「お前も能力者だったんだな。それより……何で……別
れよなんて言ったんだよ……」

弓香「まさか……茂琉!?」

弓香の元彼、宇田茂琉は

???「ああ……俺だよ……」

弓香「だって……もう好きじゃなくなったから……」

???「……ふざけんじゃ……」

ダッダッダッ

???「ねえっ!!!」

ブンッ!!

弓香「きゃあっ!!」

茂琉のエナジースーツ……ロスノフは手に持つ大きな鎌……シ
リアルサイズを弓香に振るった。幸いにも弓香には当たらなかった
が、弓香は転んでしまった。

弓香「あ……あ……」

弓香は自分が能力者であるということを忘れ、怯えている。

ロスノフ「勝手なこと言うなよ……俺はまだ好きなんだよ……」

弓香「そんなこと言ったって……」

ロスノフ「うる・・・せえっ!!!」
ブンッ!!

ロスノフはリアルサイズを弓香に向けて振るった。しかし・・・
ザッ ガキイン!!!

ボナパルト「・・・」

弓香は助けに現われたボナパルトによって救われた。

ロスノフ「何だお前・・・関係ねえだろ!!!」

ボナパルト「関係なくもないな。俺は「列強」なんでね。エナジー
スーツに変身して生身の女襲うか!? おかしいだろ?」

ロスノフ「お前に何がわかるんだよ!!!」

ボナパルト（俺の正体知らねーだろ。何勝手なことやってんだよ。）
ザッ

ロスノフ「くらえええっ!!!」

ブンッ

リアルサイズの一撃がボナパルトに向かっていったが・・・

ボナパルト「・・・」

キィイン!!!

ボナパルトのバロンソーがそれを弾いた。そして・・・

ボナパルト「一撃で終わらせるぞ!!! グランドデューク 大公!!!」

ズバアアアン!!!

ロスノフ「ぐあああっ!!!」

ドサッ

ロスノフは吹き飛ばされた。

ロスノフ「はあ・・・はあ・・・くそおっ!!!」

ダンッ!

ロスノフは逃げた。

弓香「あ・・・ありがと・・・」

ボナパルト「・・・さっきまでエナジースーツに変身してたのに、
何でさっきはしなかったんだ?」

弓香「え・・・」

ボナパルト「まだまだ「列強」には程遠いな。フッフッフ・・・」
弓香「だって・・・初めてだもん・・・」

ボナパルト「あっ、そうだったのか・・・アクション作らないか？」

弓香「えっ？・・・でも・・・」

ボナパルト「聞いてみただけだ。いやならいい。じゃ、俺帰るわ。」
タッタッタツ

弓香「あのっ！」

ボナパルト「ん？」

ボナパルトは足を止めた。

弓香「あなた・・・誰・・・？」

ボナパルト「・・・俺か？「列強」のボナパルトだ。じゃあな！！」
タッタッタツ

ボナパルトは去っていった。

弓香「・・・」

興の家

興は今日の事をとても後悔していた。

興「何言ってるんだろ自分・・・はずかし・・・」

サツ　　ピッピッピ

興はチェインジビジョンを取り出し、「アクション作成」の項目をクリックした。

興「アクション名は・・・不明としとくか・・・まだ一人だつての。」

メンバー探しは本格的に始動した。

終

energy23：チーム

翌日 3年2組教室

ガラガラガラッ

流堂が3組からやって来た。

流堂「栄己、どうですか？メンバー集め。」

興「九条か、まだまだだつての。ま、あと二週間あるだろ？」

鋼健「こつちもまだまだだぜ。そつちは？」

流堂「一人誘いましたよ。」

2人「マジで!？」

興「誰なんだよ？」

鋼健「こりゃ負けらんねえな・・・」

流堂「まあまあ、そつちが誘えたらこつちも教えましょう。」

鋼健「焦らすなよ、オイ・・・」

興「まさか九条がな・・・」

夕方 C級組織、「のど雷雷団」のアジト

「雷雷団」のメンバーは全員ボナパルトに倒されていた。

リーダー「ハア・・・これが「漆黒卿」の力か・・・」

ボナパルト「「漆黒卿」？スターウォーズじゃあるまいし。」

リーダー「お前の通り名だ・・・ハア・・・知らなかったのか・・・
ゲフツッ！」

リーダーは気絶した。

ボナパルト「あのな。俺はボナパルトだ！ナポレオン・ボナパルト
が好きだからな!!」

タッタッタッ

ボナパルトは去っていきこうとした。しかし・・・
????「今、ボナパルトって聞こえたが・・・」

『光和学園』のある生徒がアジトの近くまで来ていた。

ボナパルト「誰だありゃ？遠くにいるし私服だからわからんわ。
それに俺を探してるってどういうことだ？」

「???」・・・気のせいか。」

男が去ろうとした時・・・

ボナパルト「ボナパルトつてのは俺だが？何か用か？」（へっ、エナジースーツを着てたら何か心強いな。てかあの男結構ゴツイってか・・・俺と同じ二組の岩国じゃねえかよ。）

その男・・・岩国隆二はボナパルトを睨んだ。

隆二「お前がボナパルトか・・・エナジースーツで俺と勝負しろ。」

「

ボナパルト「・・・ああ。わかった。さっさと変身しろ。」

隆二「ああ・・・」

サッ ピッピッピッ

隆二「アイゴイル・・・」

カアアアッ ジャキーン！

隆二のエナジースーツは灰色でやはり・・・ゴツイ。肩には大きな丸い盾が付いている。

アイゴイル「又ウウアアアッ！！」

ブンッ ドゴオオッ！！

ボナパルト「うわつと！！」

アイゴイルはその大きな拳をボナパルトに向けて振り下ろした。ボナパルトは回避した。

ボナパルト「俺お前に恨まれるようなことしたか？」

アイゴイル「お前に・・・弓香は渡さん！！」

ビュッ ドゴオオッ！

ボナパルト「そうかそうか・・・岩国と尾津は幼馴染でお前は尾津のことずっと好きだったもんな。」

アイゴイル「ああ、宇田はもうとっちめたんだがな・・・」

ボナパルト「俺は尾津を救った側なんだけどな・・・」

アイゴイル「その後自分のフアクションに誘ったらしいじゃねえか

！恩を売って誘うなんて最低だな！」

ボナパルト「いやいや、あれは半分冗談で・・・」

アイゴイル「うるせえっ!!!」

ガチャ グオツ！

アイゴイルは丸い盾・・・ガードナーを肩から外すと、ボナパルトに繰り出した。

ドゴオオツ!!!

ボナパルト「グハアアツ！」

盾で攻撃するとは思わなかったボナパルトは攻撃を喰らい、吹っ飛んでしまった。

アイゴイル「まだまだあ!!!」

ブンツ！ ブンツ！

ボナパルト「くそっ!!!」

ボナパルトは体勢を立て直し、アイゴイルの連撃をかわした。そして、少しの間を作り、2人は再び対峙した。

アイゴイル「「列強」など大したことないな。お前がえらそうにできるのもこれまでだ。」

ボナパルト「元々えらそうになんかしてねえよ。」

アイゴイル「自分が強いと自覚していたからこそ、弓香をファクシヨンに誘ったんじゃないのか!!!?」

ボナパルト「ま・・・まあ・・・」

アイゴイル「だが、俺はそういう調子にのった奴が嫌いなんだ。」

ガチン！ バツ！

アイゴイルはガードナーを肩に戻した。そして、大きな拳を前に突き出した。すると・・・

アイゴイル「くたばれ。メガシユートパンチ！」

バシユウウ・・・

大きな拳がロケットパンチの要領で、ボナパルトに向かって行った。ボナパルト「・・・」

スツ・・・

アイゴイル「かわしたって無駄だ。この拳は敵を追跡する！」

拳は方向転換し、また向かって行った。しかし・・・

ボナパルト「小暗黒空間コスモブラックホール・・・」

ヴァン・・・

アイゴイル「何っ!!」

ボナパルトの腹部が闇に包まれに拳は吸い込まれてしまった。そして・・・

ボナパルト「開放だ・・・」

ヴァン・・・バシユウウ・・・!!

アイゴイルの腹部の近くにできたブラックホールから拳が出てきた。ズドッ!

アイゴイル「グハアアッ!!」

ガクッ・・・

拳はアイゴイルの腹部に直撃し、あまりのダメージに膝をついてしまった。

アイゴイル「く・・・そ・・・これが「漆黒卿」の力か・・・」

ボナパルト「これ聞くの二回目なんだけど。てかみんな言ってるっ

てことはチェインジビジョンにそう載ってあるのか・・・」

アイゴイル「お・・・俺は・・・」

アイゴイルはなおも立ち上がるうとする。

ボナパルト「あのお、俺は尾津に何もしてねえぞ。てか・・・俺のファクションに入れ！」

アイゴイル「な・・・何・・・?」

ボナパルト「俺が「漆黒卿」なら・・・お前は「鉄壁卿」だな。」

アイゴイル「か、勝手に話を進めるな!俺はまだ」

ボナパルト「尾津も場合によってはこっち来るかもしれねえぞ。」

アイゴイル「・・・!」

ボナパルト「さあ、どうする?」

アイゴイル「・・・わ、わかった。」

ボナパルト「ありがとよ。で、ファクションの名前はどつする?」

アイゴイル「そういうのはお前が決めるよ。」

ボナパルト「そうだな。じゃあ・・・」

????「あれ？ボナパルトじゃないですか？」

ボナパルト「ん？誰だ？」

突然、ボナパルトの、前に現われたのは・・・フアクションを作ったばかりのパトリカスだった。

パトリカス「いよいよ、あなたもフアクションを作ったようですね。」

ボナパルト「お前に遅れはとりたくないんでな。で、お前の仲間はここにいるのか？」

パトリカス「ええ、いますよ・・・って・・・いませんね。あなたも捜してくださいよ。」

ボナパルト「どんな奴なんだ？」

パトリカス「変身している状態なら、白い装甲に大きな鎌が特徴的ですね・・・」

ボナパルト「大きな鎌？」（大きな鎌って・・・まさか・・・）

波乱の前兆であった。

終

エナジースーツ紹介

アイゴイル

装着者 岩国 隆二

武器 大きな拳

ガードナー

ボナパルト「大きな鎌っていつたら・・・」

パトリカス「知っているのですか？」

ボナパルト「ああ、昨日のことなんだが・・・」

グオツ！

ロスノフ「漆黒卿」！昨日の借り、返してもらっぜー！！」

ロスノフは後ろからボナパルトを不意打ちをした。ボナパルトはかわした。

ボナパルト「こいつか？仲間っていつのは。」

パトリカス「ええ、そうですよ。」

アイゴイル「昨日はそいつと、そして今日は俺と・・・大変だな、お前も。」

ボナパルト「まあな。」

ロスノフ「ごちゃごちゃ言ってんじゃねえ！パトリカス！「漆黒卿」と戦っていいですか!？」

パトリカス「別にどちらでもいいですよ。」

ボナパルト「あゝ面倒くせ。」（てか「漆黒卿」って二つ名をみんな知ってるんだな・・・）

ロスノフ「くらええええ!!」
ブンツ!!

ロスノフはリアルサイズでボナパルトに襲い掛かったが・・・

ボナパルト「学習しろよ・・・グランドアユーク大公!!!」
ズバアアン!!!

ロスノフ「ガハアツ!!!」
ドサアツ!

ボナパルト「また負けたな・・・」

パトリカス「果たしてそうですか？」

ボナパルト「そうですか何も、昨日はこれで終わっ・・・何!？」

ムクツ

意外にもロスノフは立ち上がった。

ロスノフ「ハア・・・ハア・・・昨日はこれで終わったが、今回はそうはいかねえぜ。このロスノフの能力ちからみせてやるよ。」

ボナパルト「ほう、やってみる。」

ロスノフ「この形態はアポカリプス・4・テッセリスと言う。つまり俺はまだ3つの形態を持っているということだ!!」

ボナパルト（やはり九条がスカウトするだけあるか・・・）

パトリカス「宇田君は結構強いですよ。」

アイゴイル「おい・・・お前さつき宇田って言わなかったか？」

パトリカス「ええ。あの男は宇田君ですよ。というよりもあなたは誰なんですか？僕の正体は教えられませんが。」

アイゴイル「・・・」

ロスノフ「さあ、いくぞ！アポカリプス・・・」

ズゴオオツ！！ ドサアアツ！

ボナパルト「何だ!？」

ロスノフはアイゴイルに殴られた。

ロスノフ「てめえ・・・邪魔すんな!」

アイゴイル「宇田茂琉・・・てめえ・・・」

ロスノフ「な・・・何だ・・・まさか!!？お前岩国!」

ボナパルト（・・・そうか。そういうことか。すっかり忘れてた。）

アイゴイル「そうだ！てめえ反省もせず・・・」

ロスノフ「おいおいおい！大体な、弓香・・・いや尾津さんの彼氏でもねえお前が怒る権利・・・」

アイゴイル「メガシユートパンチ!!」

バシユウウツ!! ズドンツ!!

ロスノフ「グハアアツ!」

ドサアツ!

アイゴイル「友達が泣いてるから怒る!!その何が悪い!!?」

ボナパルト「おいおい。気持ちわかるが乱入すんなよお。」

アイゴイル「事情が変わったんだ。」

ボナパルト「まあ、落ち着け。宇田もこれからは俺たちの仲間になるんだぜ。」

アイゴイル「何だと・・・！」

パトリカス「どうやらその男も落ち着いたようなので、ゆっくり話しますか。」

ボナパルト「ま、そうだな・・・」

アイゴイル「・・・わかった。てか、ボナパルトの正体は一体・・・」

ロスノフ「そういえば・・・パトリカスさんの正体は？」

ボナパルト・パトリカス「・・・」

2人は黙った。そして・・・

2人「「列強」は正体を隠さなければならんだ！」

ロスノフ「そ、そうなんですか！？だったらもう仕方ないですね・・・」

アイゴイル「正体を明かしてはだめなのか・・・」

ボナパルト（やっぱり「列強」という名に弱いな。すっかりだまされてやがる。）

パトリカス（正体をバラすのは・・・やはり後にしましょうか。）

2人は「列強」であることをいいことにウソをついていた。そして

2人は、変身した状態で、変身を解いた茂琉と隆二に『真華学園』について話した。

隆二「『真華学園』との模範戦闘か・・・」

パトリカス「どうですか？これからも仲間は増えますし。」

ボナパルト「どうだ？」

茂琉「戦って何か貰えるのか？」

パトリカス「貰えるといいますと・・・ボナパルトは帝塚から何か聞いていますか？」

ボナパルト「・・・なんだっけな・・・あ、思い出した。「列強」の戦いに参加した能力者は、功績によっては、「列参」の称号が与

えられるそうさだ。」

茂琉「「列参」？」

ボナパルト「ああ。列強の許可次第ではA級組織と戦うことができそうさだ。ま、A級組織と戦いたいなんで俺らでも思わねえがな。」

パトリカス「「列参」ですか・・・いいじゃないですか。」

隆二「たしかに悪くねえな。」

茂琉「「漆黒卿」と「風舞官」ふうぶかんがいりや、『真華学園』なんて・・・」

ボナパルト「「風舞官」？パトリカスの二つ名か？」

パトリカス「どうやら勝手に名づけられてるようなのですよ。」

ボナパルト（俺だけじゃないのか・・・）

隆二「あ、そういえばボナパルト、ファクションの名前は決まったのか？」

ボナパルト「「ヴァンデミール」がよかったのにな・・・」

ボナパルトは大のナポレオンのファンである。

ボナパルト「・・・俺の二つ名が「漆黒卿」か・・・「ロードプロテクター護国卿」ってのはどうさだ？」

隆二「ロードプロテクター？」

ボナパルト「イギリスで革命に成功したクロムウエルに与えられた称号「護国卿」が由来だ。ま、国家直属に指令を受けることだってありえる「列強」にはびつたりの名前だと思っがな。」

隆二「俺あんまり歴史には詳しくねえからどうだっていいや。」

ボナパルト「何だそれ。そういえば、パトリカスのファクションの名前はなんていうんだ？」

パトリカス「「ナイトハインス」ですよ。」

ボナパルト「そうなのか。」

茂琉「これからまだ仲間が増えるのですか？」

パトリカス「ええ。少なくとももう一人の「列強」がいますので。」

隆二「まだいるのか。」

ボナパルト「お前らが紹介したい奴がいたらそれも構わねえぞ。」

隆「ああ。わかった。」

パトリカス「それでは今日は解散としますか。」
『真華学園』との模範戦闘まであと三週間。

終

エナジースーツ紹介

ロスノフ

装着者 宇田 茂琉

武器 シリアルサイズ

能力 『アポカリプス』形態変化

energy25:ウエーブ

模範戦闘まであと二週間。

3年2組

興「座原、お前フアクション作ったのか？」

鋼健「まあな、一人誘った。」

興「誰だよ。」

鋼健「後で教えるよ。」

興「変な奴誘ってないだろうな？」

鋼健「変な奴って？」

興「元「メンシエヴィキ」とかそんな感じの奴だよ。」

鋼健「当たり前だ。」

興「当たり前かい！ふざけやがって……」

鋼健「大丈夫だって。悪い奴じゃねえからよ。じゃ。」

鋼健は自分の席に向かっていった。一方そのころ……

隆二「なあ弓香。あれから、ボナパルトからは何にもないのか？」

弓香「うん。何も無いよ。」

隆二「あの男一体誰なんだ？「列強」だからって本当にバラしちゃ

いけねえのか？」

弓香「わからないよ。」

隆二「だよな。」

その日の夕方

弓香は一人で家に帰っていた。すると……

???「おい！お前『光和学園』だよな！」

制服を着た数人の男と一人の女が弓香に声をかけた。

弓香「は……はい……」

生徒A「俺ら『真華学園』なんだけどよ。お前「列強」と仲いいだろ？」

弓香「いや・・・仲良くは・・・」

「???」「ボナパルトと喋ってたでしょっていつてんのよ!?!」

そう言ったのは狐目をした女、江島藍である。

弓香「・・・何で知ってるの?」

江島「うちの生徒で見た奴がいるのよ。『漆黒卿』は有名だからね。」

弓香「・・・それで?」

江島「人質になりなさいよ。」

弓香「・・・何で?」

江島「あんたが知る必要はないわ。お前たち、おやり。」

生徒たち「!!!」「!!!」「!!!」

ピツ　　energy

生徒たち「!!!」「S-1」「!!!」

カアアアツ　ジャキーン!

弓香「まさか・・・エナジースーツ!?」

生徒たちは赤をベースにしたエナジースーツに変身した。

江島「量産型エナジースーツS-1、量産型とはいえ、集団戦には強いよ。」

弓香(変身・・・するしかない!)

ピツ　　energy

弓香「デユナーク・・・」

カアアアツ　ジャキーン!

江島「へえ・・・あんたも能力者だったんだ。」

S-1A「へっ、俺たちと戦うのか・・・」

S-1B「一人じゃあねえ・・・」

S-1C「江島さん、我々は・・・」

S-1D「命令を遂行するのみ。」

江島「さ、おやり!!!」

ババツ

4人は腰にある剣を構えた。そして・・・

4人「……うおおおつ」「」「」
ダッ

弓香に斬りかかった。しかし……
サッ サッ ヴァアアアツ……

弓香「……」

弓香は両掌を突き出した。そして波動のようなものを放出した。

S-1A「何だこれは……!」

S-1B「動けん……!」

S-1C「空気が……?」

S-1D「空気に押されてるような……」

4人は動けなかった。

江島「へえ……なかなかやるじゃない。でも……」

ピッ 〈energy〉

江島「ステーナ……」

カアアアツ ジャキーン!

一人遠い位置にいた江島は紫のエネルギーに変身した。動きやすそうな格好である。

ステーナ「フッフ」

シャキーン

ステーナの指から爪……クレインネイルを出した。そして……

ダダッ ビュッ!

ズバアアツ!!

デユナーク「キャアアアツ!!」

背後を突かれたデユナークはステーナの攻撃を受けた。

ステーナ「どうやらこのエネルギーは攻撃型じゃなく補助型らしいねえ。さ、おやり」

4人「……ははあっ!!!!」「」「」

ダダッ

ズバアン!!

4人の攻撃を受けたデユナークはその場に倒れた。

デユナーク「ハア・・・ハア・・・あんたは何がしたいの？」
ステーナ「あなたが知る必要はないわ・・・ビュートクレイン！」
サツ

クレインネイルが更に伸びてデユナークに向かう。

デユナーク「・・・！！！！？？」

はずだった・・・

ステーナ「ん？」

ザツ

一人のエナジースーツがステーナたちの前にデユナークをはさむ形で立っていた。

終

エナジースーツ紹介

デユナーク

装着者 尾津 弓香

能力 掌から空気の波動をだす。

e n e r g y 2 5 : ウ エ ー プ (後 書 き)

弓香を助けに来たのは誰か、今、考え中です。
みなさんは誰がふさわしいと思います???

energy 26 : バトル

ステーナ「あんた誰？てかボナパルト知ってる？」

「???」誰でもいいだろ。お前らなにやってんだよ。」

その男は・・・ロスノフだった。ちなみにデユナークからは見えな
い位置にいた。大ダメージをつけているため当然動くこともできな
かった。

S - 1 A「おい、姐さんが聞いてんだ。返事したらどうなんだ？」

ロスノフ「・・・ああ、知ってるよ。」

S - 1 B「ほう、なら教えるよ。教えねえと、こいつみてえになる
ぞ。」

ドゴオツ！

デユナーク「がはあっ！！」

ロスノフ「なっ!?!」

S - 1 Bはデユナークの脇腹を蹴った。

S - 1 B「さあ、話してくれるか?・・・???」

S - 1 Bが再びロスノフに目を向けたとき、彼はいなかった。

ステーナ「!?!?!?!あそこだ!?!」

ロスノフ「うおおおらあああっ!?!?!」

ロスノフは空高く飛び上がっていた。そしてS - 1 Bに向かってシ
リアルサイズを振り下ろしていた。

S - 1 B「な、なにいいいい!!」

ズバアアアン!!

シリアルサイズがS - 1 Bの体を大きく切り裂いた。ロスノフはS

- 1 Bを一撃で倒した。

ステーナ「ちっ！お前たち！やりな!!」

3人「ハハハハはっ!?!?!」

サッ ダダッ

3人は剣を構えて、ロスノフに斬りかかった。しかし・・・

ロスノフ「死の舞踏ダンス……」

タンツ　　ザツ　　ブウンツ　　ズバアアツン！！

3人「……ぐあああつ！！」「」

ロスノフは高く飛び上がり、3人の中心に降り立ち、シリアルサイズを全周囲に一閃した。3人はダメージを負い、倒された。

ロスノフ「次はお前だ。」

ステーナ「チツ、めんどくさいことになったね。」

シャキーン

ステーナはクレインネイルを出した。

ロスノフ「お前がボスか。絶対許さねえ！！」

ステーナ「フツ、アタシには敵わないよ。」

2人の戦いが始まるうとしていたその時……
ザツ

ボナパルト「お前ら何やってんだ！？」

ボナパルトがやって来た。

ロスノフ「ボ、ボナパルト！！」

ステーナ「へえ、あんたがボナパルトかい。」

ボナパルト「ああ……ところで、そこに倒れてるやつは？」

デユナークはいつの間にか気を失っていた。

ステーナ「こいつを知らないのかい！？この前喋ってる姿を見た奴がいるらしいけど。」

ボナパルト（喋った？……まさか、尾津！！？）

ステーナ「その女にあんたについて聞き出してたら何も知らないって言うもんだから、アタシがやったのさ。」

ボナパルト「何だと！？ていうか俺について聞き出してどうするつもりだったんだ！？」

ステーナ「あんたを今のうちに潰しておこうと思ったのさ。アタシら『真華学園』の勝利のためにね。」

2人「『真華学園』だと！？」

ステーナ「そうよ。模範戦闘の前に潰しておきたかったのよ。あん

たらは知らないと思うけどさ、模範戦闘ってその学校のランクを決めるのよ。」

ロスノフ「どういうことだ？」

ステーナ「政府はその学校の能力者の強さで治安の善し悪しをギリシヤ文字の順番にランク付けするのよ。あんたらのところは「帝王」がいるから当然ランクはよ。ちなみにこちらはよ。」

ロスノフ「そんな情報どこでわかるんだ!？」

ボナパルト「クツクツク、『光和』以外は皆「チェインジビジョン」の使い方を熟知しているようだな。」

ロスノフ「「チェインジビジョン」にだと!？」

ボナパルト「ま、俺は知っていたがな。」

ステーナ「でも政府は実際にこの目で判断しようとしなないのさ。要は強ければランクは高く、弱ければ低い。だから・・・」

ボナパルト「どんな手を使ってでも、ランクを上げたかったわけか。」

ステーナ「そういうことよ。」

ボナパルト「関係ない奴をいたぶってもか・・・本当は今すぐお前をぶん殴りたいところだが・・・今日は見逃してやる。」

ステーナ「ふっ、そうかい。じゃ、遠慮なく帰らせてもらっよ。」
タツタツタツ

ステーナは去っていった。

ロスノフ「何で今戦わないんだよ？尾津がやられたんだぞ!」

ボナパルト「模範戦闘まで待て、あと二週間だ。それに、俺たちは状況の把握がまだできてないようだしな。」

ロスノフ「確かに、俺たちの知らないことがありすぎるな。でも・・・」

ボナパルト「「列強」が他校の生徒と無闇に戦うのはやめといた方がいいしな。てかお前が助けたのか。意外だな。」

ロスノフ「そ、そりゃあ・・・そうだ、もし尾津が目覚めたときはお前が助けたことにしてくれないか。」

ロスノフにはまだ後ろめたい気持ちがあった。
ボナパルト「・・・わかったよ。」

『真華学園』特別室

????「主席、江島様がボナパルトの始末に失敗いたしたとのこと
です。」

主席「別に様をつけなくてもいいぞ、呼び捨てでいい。来島、お前
は総司令だ。名前だけの私とは違う。」

『真華学園』総司令、来島周あまなは主席、沢田 紅貴べににそう言われた。

周「そんなことはございません。あなたはれっきとした『真華学園』
の王でございます。」

紅貴「ふっ・・・恩に切る。江島がしくじったか・・・想定内では
あるが、これでは二週間後の決戦ではどちらが勝つかわからんな。」
周「戦局は・・・互角ですか。」

紅貴「ああ。だが、我々は勝つよ。我々が最強であることを教えて
やる。」

終

特別室前

ボナパルトは気絶した弓香を抱えて、特別室の前に来ていた。

ボナパルト「ここから先は国家機密だ、「列強」以外入ることはできないのでな。ま、尾津は特別だがな。」

ボナパルトは弓香の目が覚めるまで、特別室に連れて行くことにした。

茂琉「あ、ああ・・・そんじゃ俺は・・・」

2人はここで別れた。

パツポツピツ プシュー グオンッ

ボナパルトは入り口の横にある機械に暗証番号を打つと、入り口が開いた。

???「お前・・・変身したままなのか。」

ボナパルト「あれ・・・?」

部屋には王史がいた。

王史「というより、なぜ栄己が尾津を抱えているのだ?」

ボナパルト「ま、とりあえず・・・」

ピツ カアアアツ バアアアン!

ボナパルトは変身を解いた。そして、これまでの事情について王史に話した。

興「てなわけなんだ・・・」

王史「そうか・・・」

興「お前・・・何か知ってるのか?」

王史「ああ、明日にでも話そうと思っていたことなんだが・・・」

王史はこう話した。

この世代が高校生になれば、この大阪で一番の高校を日本政府は決めようとしているのだ。今回の「模範戦闘」はそのプロトタイプのようなものだ。そして、そのことを知らなかったのは自分たちだけ

で、他の学校は知っているらしい。

興「だからか・・・」

王史「何かあったのか？」

興「おう。実は『真華学園』の奴らが尾津を誘拐しようとして襲ってきたやつだ。」

王史「何で尾津なんだ？」

興「変身した俺と喋っているところ『真華』の生徒が見てたのさ。

本当の目的は・・・俺を誘い出すことだったわけよ。」

王史「そうまでして勝ちたいわけか・・・」

弓香「ん・・・えっ」

目を覚ました弓香は特別室を見て驚いた。

興「マズイツ！！インバルト！」

カアアアツ ジャキーン！

弓香「あ・・・あなた・・・」

ボナパルト「お・・・おう・・・」（あぶね・・・）

どうやら弓香はインバルトの正体には気付いてないようだ。

弓香「ここ・・・どこ？」

王史「『列強』だけが入ることができる特別室だが、お前の場合は特別だ。」

弓香「え？」

ボナパルト「お前が『真華』の奴らにやられてたところを、たまたま通りかかった俺が助けたんだろっが。」（宇田のことは伏せておくか・・・）

数分前 特別室に来る途中

茂琉「あのさ・・・」

ボナパルト「ん？どうした??」

茂琉「俺が助けたことは・・・尾津に言わないでくれ。」

ボナパルト「何でだよ？」

茂琉「だって・・・」

ボナパルト「襲い掛かったことのあるお前には助ける義理がない・
・って言いたいのか??」

茂琉「ああ・・・」

ボナパルト「・・・ま、いいだろう。黙っておいてやるよ。」

弓香「で、あの人たちは?」

王史「『真華学園』の連中はもういない。安心するんだな。」

弓香「真華・・・学園・・・」

ボナパルト「まあ、あんたには関係ないことだ。それより、フアク
ション入るか?」

ボナパルトはこんなときでもフアクションへの勧誘を忘れない。

弓香「え、あの・・・」

当然、弓香は戸惑う。二回も危険から助けてもらった人の誘いを
断るとするのは、あまりにもおこがましいのでは・・・そう考えた。

王史「おい、何軽々しくフアクションに誘っている。」

ボナパルト「味方は多いに限るだろ。」

王史「フアクションはそうやって誘うものではない。ましてや、恩
義をかさにして・・・尾津さん、本気で考える必要はない。」

ボナパルトは開いた口が塞がらなかった。

弓香「・・・じゃあ、そろそろ帰りますね。」

弓香は学校から去っていった。ここでボナパルトは再び変身を解
いた。

興「ある意味変身しててよかったあ・・・」

王史「自分は『模範戦闘』のことだけを考えておくんだな。」

『模範戦闘』開始

終

エナジースーツ紹介

デユナーク

装着者 尾津弓香

武器 エアムーバー

energy28：シックス

『模範戦闘』・・・日本政府がエナジースーツの能力向上を目的とした制度である。

ルールは以下の通りである。

- ・戦闘は「ユーゼスグラウンド」で行われる。
- ・メンバーは選抜式で、最大25人まで。
- ・時間、期間などは、政府が決めたものに従わねばならない。

光和学園と真華学園との『模範戦闘』当日

光和学園特別室

ここに、メンバー全員がそろっていた。

「時間の通知はまだか？」

1人目、「漆黒卿」栄己興

音とともにチェインジビジョンが光った。

「どうやら来たようですよ。時間は・・・あと一時間後ですか。」

2人目、「風無官」九条流堂

「俺ら足手まといにならねえかな!？」

「うるせえ。」

3人目、宇田茂流

4人目、岩国隆二

「フッフッフ、何を緊張する必要がある。潰せばいいんだろ?」

5人目、「真紅の処刑人」ルーシユ座原鋼健、そして・・・

「戦うわけですね?ヒヒヒ・・・」

「・・・お前の言ってた仲間って連谷のことかよ。」

興が文句をこぼすが、鋼健は余裕の表情を崩さない。

「座原さんのお誘いに乗っただけですので、ヒヒヒ・・・」

6人目、ついでにへりや連谷縁矢

「で、場所はどこなんですか?」

「自分のやつを見る。宇田は何をさつきから緊張してんだ？」
「なっ！！」

突然、隆二が叫んだ。

「どうした岩国！？」

「場所は……『真華学園』って」

「え？」

皆のチェインジビジョンにもそう書いてあった。

「どう考えても向こうの方が有利じゃねえか！？」

「まあそう怒らなくてもいいではありませんか。」

「場所なんざ関係ねえ、フフフ……」

真華学園特別室

「まさか場所がここだとはな、日本政府め、余計なことを……」

主席 沢田紅貴は不満を漏らしていた。

「これはチャンスと捉えるべきでは？」

「そうよ、私たちのほうが有利ってことよ？」

総司令 来島 周あまね 側近 江島 藍あおいは紅貴にそう言った。

「ま、そうだな。」

「ここは、『真華』の王があなたであることを示すいいチャンスで
ございます。」

「ふふっ、あなたが喜ぶのなら何だってやるわよ。」

「……あと30分か。そろそろだな。」

ガチャッ

「やあやあ、これは主席方々おそろいで、そろそろ時間では？」

「まだ早い、まだ30分ある。」

「いやあ、沢田さんがこのイスを私にくれる時間だと思ったのです
がねえ……」

やけに挑発的なこの男は遊撃隊長 少田 劉しゅうである。

ユーゼスグラウンド（UG）

まだ30分前だというのに、光和学園のメンバーは変身し、UG内をウロウロしていた。

「連谷のエナジースーツってそれか・・・」

「エグゼスと言います。」

連谷のエナジースーツ・・・エグゼスは少し小じんまりとしている。

「そろそろ行くか。」

「ちょ、ちょっと早くないですか?」

「彼は、いつもそうですよ。」

興は約束の1、20分前から、行動をおこすという変わった癖があった。

真華学園屋上

「もう時間ですか?」

「ああ、そろそろだ・・・少田」

「ふむ、戦闘開始だ。」

真華学園まで1km

「ん?」(今何か聞こえたような・・・)

「どうした、栄己」

「・・・いや、何か音がしたような・・・」

「伏せる!」

ビシユビシユッ! 十数個の銃弾が地面を撥ねた。

「まだ到着してねえだろ!?」

真華学園屋上

劉を含めた三人がいた。一人はガトリング銃を構えて変身していた。

「驚いてるようだね。戦いは始まっているのだよ」

「ハハハハッ!あわててやがらっ!」

一人は少田の隣で大声を張り上げて笑うガタイのでかい男、幕僚長 林 虎三はやし とらぞう エナジースーツ名はジユゲンである。

「これで全員潰せば私が主席にもなれるもの・・・」

「この作戦考えたのはお前だからな。ハハハハッ！」

「真華学園の敷地内は半径1kmまでということをあいつらが知っているかどうかだ。それに・・・」

「この本館は10階建て、威嚇射撃ぐらいにはなりますからね」

「6人を分断させることぐらいはできる。なあ、章平」

もう一人は遊撃参謀 登 章平のぼり しょうへいである。

「すまん林。私の作戦に協力してもらって。」

「俺は強いもんにつく。それだけだ。」(ま、いつ裏切るかはわからんがな・・・)

「これはどうも。」(表向きはまだ沢田に取り入っているクセに・・・)

戦いはまだ始まったばかりである。

終

エナジースーツ紹介

エグゼス

装着者 連谷 縁也

武器 ミングレルクロー

energy29：スモーク

ガガガウン！！

「チイツ！！」

6人はジユゲンのガトリング弾をかるうじてかわしていた。

「栄己！どうするんだ！」

アイゴイルは叫んだ。

「コスモブラックホール小暗黒世界は範囲が狭いから無理だ！」

「・・・鉄のカーテン」

バチイツ バチイツ

「ふん。これならどうだ。」

ジユガシヴのバリアが全員の前方に張られた。

「「列強」になれたのも、その絶対防御の能力ですか？」チカラ

「生憎だがそれだけじゃねえんだよ九条。」

「誰かいるぞ！」

ボナパルトは屋上を指差した。5人は誰かいることを確認した。

「3人のうちの1人が、撃っていたのは・・・」

真華学園屋上

「バリアか・・・まいったな・・・」

「気を落とすな少田！大したこたねえ！！」

「気づかれたようですが」

「登まで・・・案ずるな。策はある。」

ガチャ バシユウ・・・

ジユゲンはガトリングの真ん中にある大きな銃口からミサイルらしき物を発射した。

「このミサイルは煙幕弾でハツタリだ。バリアに当たったところをお前ら二人で攻撃したら6人でも勝てるんじゃないやねえか？」

「なるほど。面白い作戦だな。ただ・・・」

「何だ？」

「お前は自分の手を汚さないつもりか？」

真華学園1km

「何だありゃ？ミサイル？」

ロスノフは慌てだした。

「おい、大丈夫なのかよ！？座原！？」

「ビビリすぎだろ。フフフ・・・」

「ここはオレが出る。いいな、座原」

前に出たのはボナパルトだった。

「ああ。あんたが適任だ。」

ヴァン・・・

ボナパルトの腹部が闇に変わり、そして・・・

「コスモブラックホール小暗黒世界！！」

ミサイルは闇に包まれた。

「開放だ・・・」

ヴァン・・・

ブラックホールが屋上の真上に現れた。

屋上

「バカな・・・林！！」

「すまねえ！へっ、ある意味煙幕弾でよかったかもな。」

ボシユウ・・・ ミサイルが地面に突き刺さり、あたりは煙に覆われた。

「どうすんだよ少田！オレは下に戻るぜ！」

「・・・ふん。勝手にしろ。」

ジユゲンは階段で下に降りた。

「俺らも変身しておくか」

ピッピッピッ

「サブラント」

「シャオピン」
カアアアツ ジャキーン
二人は変身した。

真華学園前

ミサイルが屋上を包んでいる間に、6人は門前まで走った。

「どうしますか？敵は屋上と校内の二手に分かれていますよ。」

「九条、おそらく校内にはさっきの奴よりもっと強い奴がいるはずだ。お前とオレと座原は校内行き確定だろ。」

ボナパルトは「列強」とそうでない者で二手に別れて行動するという作戦を考えた。

「屋上行きは奴も校舎を通るんじゃないのか？」

「まあ、そうだな・・・。」

ここで、ジュガシヴが何かをひらめいたようだ。

「岩国、いいことを言ったな。お前は俺らと来い。」

「どういうことだ？」

屋上

「ゲホッ、ゲホッ、この煙、いつまで続くんだ？」

「とりあえずは煙が晴れるのを待ちましょう。」

「ああ、そうだな。あいつらは階段からでしか来れないはず・・・。」

「シャア！！」

ズバァン！ 突然、何かサブライントを切り裂いた。

「隊長！大丈夫ですか！？」

「ああ、だが何処から・・・。」

「ヒヒヒ・・・地上から屋上には届かないとでもおもったか？」

切り裂いたのはエグゼスであった。彼には跳躍力があつた。

「貴様・・・よくも隊長を」

シャオピンがエグゼスに向かったその時・・・

「ウオラアアツ!!」

ザンツ! またもや何者かがやってきた。

「今度は誰だ!?!」

「ああ、怖かった・・・」

二人目はロスノフだった。

「あれ?二人になってる。」

「ちょうど良いな。ヒヒヒ・・・」

座原が編み出した作戦は跳躍力のある二人が地上から屋上に奇襲をしかけるというものであった。

やっと煙が晴れてきた。

「隊長、してやられましたね・・・」

「ふん。たいしたことはない。さっさと倒すぞ。」

「連谷、ここまでできたからにはやるしかねえぞ!」

「・・・足が震えてるぜ。ヒヒヒ・・・」

「う、うるせえな!」

(ふっ、どうやら「列強」ではないようだな・・・)

ロスノフのビビリようを見たサブラントは、笑みを浮かべながら口を開いた。

「どうやら、戦い慣れしてないようですね。」

「え?」

「いやあ、でも良かった。ちょうど私、出世したかったんですよ。」

「だからなんなんだよ!?!」

「異名とか持つてます!?!」

「そんなもんねえよ!」

「「列強」ではないようですね。残念ながら私にはあるんですよ。」

「お前、「列強」なのか!?!」

「ええ、これでも「毒蛇」^{ドクバミ}って呼ばれてるんですよ」

最初の激突が始まった。

終

energy29：スモーク（後書き）

どうも、ラスプーチンです。

やっと、戦いらしい戦いが展開できそうで、どういう風にしようか
考え中です。

さて、今回の悪役的存在『真華学園』なんですが、実は、そのキャラクターには一つの共通点があるんです。読者の皆さんも探してみてください。

energy30:ポイズン

「し、真華に「列強」は何人いるんだよ？」

「私もはつきりとはわかりません。あなたは「列強」ではなかったのですか？これは残念ですねえ……」

サブラントは笑みを浮かべながらロスノフに圧力をかける。ロスノフが焦ることは彼の思うつぼだった。しかし……

「ヒヒヒ、我々は戦いを楽しみにしているんですよ。口先だけが「列強」だと、ガツカリしてしまいますので」

エグゼスは違った。彼は元「メンシェヴィキ」で、座原とは友人の間柄だった。つまり、このような場面は彼にとって稀ではなかったのだ。

「ほう、言いますね……」

サブラントは眉をひそめた。そして、シャオピンにこう指示した。「お前はそこの世間知らずを仕留める。オレはあの臆病な男をやる。」

「はい」

シャツ 彼は環刀……龍断刀りゅうだんでエグゼスに斬りかかった。エグゼスはミングレルクローで受け止めた。

「いきなりですね……」

「戦いを楽しむのはお前たちの勝手だが、オレは楽しむ気はない。ただ倒すだけだ。」

ガキイン ギギイン！ シャオピンの攻めには全くスキがなく、エグゼスは防戦一方だった。一方……

「まだ、怯えているのですか？」

シャキツ サブラントは指先（中指・人差し指）から5cm程の針……点殺針を出した。ロスノフもシリアルサイズを構えた。

（くそっ……やってやる！）

「うおらっ……！」

(焦りすぎですね・・・)

サブラントはロスノフの攻撃を軽くないなすと、首に指を突き出した。ロスノフは後ろに退いたが・・・

ビュン！

「！！？」

なんと、サブラントの腕が伸びたのだ。当然ロスノフの首に針は刺さった。

「ちくしょう・・・何だ、体が動かねえ・・・」

ロスノフを体の痺れが襲った。

「毒蛇ドクバミ」っていうのはこういうことか・・・」

「一関節分、腕が伸びるんですよ。この能力チカラさえなかったら「列強」にはなれませんでしたよ。」

「これが、「列強」の壁、か・・・」

「えんえんちよつだけき 蜒蜒長墮撃」

ビュン！ また腕が伸び。今度は腹に深々と針が突き刺さった。「今度は毒を入れてませんよ。ちなみに毒が体を巡るのは約1分。その間何もできない。ハハハ・・・」

それから、サブラントの半ばリンチといえる状態が続いた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「まず、一人・・・この腕で仕留めてやる。」

サブラントは腕を振り上げた、しかし・・・

「ヒヒヒ・・・」

この声にサブラントは振り向いた。そこにはシャオピンと互角に戦っているエグゼスがいた。

「何をしているシャオピン！お前らしくもない。」

「申し訳ございません。今すぐに・・・」

ビュン！ 龍断刀がエグゼスに迫る。しかし、エグゼスは瞬間移動ともいえる速さで、シャオピンの後ろに立った。

「ヒヒヒヒヒヒ！！！」

ズコオツ！！ エグゼスのミングレルクローがシャオピンの背中

を切り裂いた。

「グウツ！」

「・・・」

これにはサブラントも開いた口が塞がらない。

「お、おのれえー！」

エグゼスは猶も攻撃を仕掛ける。だが、シャオピンも負けてられない。

ガイン！！ 龍断刀がエグゼスの攻撃を弾いた。

「斬打」

ドオオン！！ エグゼスは、まるでハンマーで叩かれたような一撃をくらった。

どうやらシャオピンはエグゼスの攻撃のタイミングをつかんだようだ。

「はっはっは！さすが我が参謀！」

「100%成功するとはわかりませんが・・・」

「やられましたね・・・ヒツヒツヒ、戦いは楽しいなあ・・・」

エグゼスは元「メンシエヴィキ」だけあって、かなり好戦的な性格だった。

「ヒツヒツヒ、お前は油断してていいのか？」

「何？」

サブラントはロスノフがいた位置を見ると、そこにはロスノフはいなかった。

「なっ！ど、どこに！？」

「うおおおらああっ！！^{デュラハン}首無し！！！！」

ビュオツ！！空に跳んだロスノフはサブラントの首に全体重を乗せた一撃を仕掛けた。

サブラントはなんとか直撃は避けたものの、肩に攻撃を受けてしまった。

「元気ありありのようですね・・・どうやらヘラヘラしている場合ではなさそうです」

(よく考えてみたら、俺は普通に栄己に勝負を挑んでたじゃねえか！栄己も目の前にいるあいつも同じ「列強」なんなら、ビビる必要はねえ！！)

ザッ ロスノフのそれまで逃げ腰だった構えがなくなった。

「今からお前にいいものを見せてやるよ。」

ロスノフは言った。

「なんででしょう？「列強」でない者の足掻き方ですか？」

サブラントはまたも皮肉を言った。しかし、今度はロスノフには通じなかった

「へっ、普通の「列強」なんかにはねえ、とっておきの能力さ^{チカラ}」

ロスノフの真の能力が、今。

終

エナジースーツ紹介

サブラント

装着者 少田 劉

武器 点殺針

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2100c/>

能力～チカラ～

2010年10月21日02時14分発行